魅せられて

前川　美和

一、幼い日々

純平は色の白い泣き虫の男の子だった。だから、アルバムを見たら、泣き顔で映っていることが多い。体は弱くはないが、よく風邪をひき、しばしば医者に通った。一歳前後の時、高熱が五日ほど下がらず、発疹も出て、舌がイチゴ状になったので、川崎病を疑われ、日赤に入院したことがある。結局、中耳炎による発熱だということで、熱は抗生物質を飲むと、すぐひいたのだが、付添いの母が何かに感染して熱を出し、それをまた純平がもらってしまい、便が白っぽい下痢になったので、退院が伸びてしまった。医者の見立てを信用できない両親は、退院してからも、川崎病だったら、心臓に何か障害が出ることもあるらしいと聞いて、しばらく心配していたものだ。

純平には二歳半離れた姉がいた。姉の昌子は大きな声でよくしゃべり、いつも外に飛び出して行って、友達と遊んだり、自転車を乗り回したりする活発な女の子で、家にじっとしているタイプではなかった。したがって、純平はいつも家に取り残されて、近所に一緒に遊べるくらいの子もいなかったし、妹の妙子も生まれたこともあって、年少児として三歳から幼稚園に通うことになった。母と手を繋いでおしゃべりしながら、幼稚園の前までは機嫌よく歩いていくのだが、いざ母親と離れるとなると、しがみついて泣くことが一週間ほど続いた。担任となった若い可愛い知佳先生に抱っこされて、泣かないでバイバイができるようになったのは四月の終わりの頃だった。泣き虫のクセにひょうきんで、みんなを笑わせるのが大好きで、面白い顔をしたり、妙なジェスチャーをしては、周りの人の笑いを取って喜んでいた。

子どもたちは晩御飯の時、その日にあったいろいろな出来事を話して、母親に聞いてもらうのが日課になっていた。御飯を食べながら、小学生になったばかりの昌子が一生懸命話していると、純平が口を尖らせて言った。

「おねえちゃん、ずるいよ！　自分ばっかりしゃべって！　ぼくもしゃべりたいのに…」

泣きながら、姉に食って掛かる様子を見ていた母は、妙子に離乳食をあげる手をとめて、笑顔で言った。

「順番、順番。お母さん、聖徳太子じゃないから、一度に二人の話は聞けないわ。じゃ、今度は純平が話してごらん」

母親に振られた純平は「おねえちゃんのせいで、何言うか忘れちゃったよ」とまた怒る始末だった。純平はおしゃべりな男の子だったのだ。

父親である聡平は以前は残業の多い職場で帰宅時間が十時を回ることもざらだったのだが、妙子が生まれてすぐに東京に転勤を言い渡され、単身赴任を余儀なくされたので、週末以外は夕食を母と子どもたちで済ませるのが当たり前になっていた。その分週末に父親が帰ってくると、子どもたちは父親にまとわりついた。聡平は山登りなどの好きなアウトドア派で、夏休みにはテントを持って、家族でキャンプに出掛けた。

純平は父親を助けて、よく働いた。テント張りから食器洗いにいたるまで、率先して手伝い、なんでもよく食べた。隙あらば、サボろうとし、すしは嫌だとか梅干し、漬物は食べられないという昌子とは対照的だった。ただ、純平にも苦手なものがあった。それは、

トマトと生しいたけだった。青臭さと食感が嫌だったのか、一度食べたきり、二度と口にはしなかった。

妹の妙子が二歳半になったとき、母がパートの仕事を始めた。家族に負担をかけない程度に社会に復帰したかったのだろう。自転車で十分で行ける高校で非常勤講師として雇われたのだ。それで、純平と妙子、二人を預かってもらわなくてはならなくなった。幼稚園は三歳以上の子どもしかみてくれないので、急遽純平も妙子と一緒の保育園に移ることになった。せっかく知佳先生や幼稚園の雰囲気にも慣れ、友達もできたのに、また別のところに行くのは、純平にとって、不安と不満でいっぱいだった。しかし、兄としての自覚も生まれつつあったので、駄々をこねて泣く妙子の手を引いて、仕方なく保育園の門をくぐった。

保育園の子どもたちは幼稚園の子どもたちとは全然違った。一口で言えば、みんな言葉づかいも荒く乱暴だった。純平は幼稚園とのギャップに戸惑った。大人しくて行儀のよい純平は、年中で入ってきた新参者ということで、入園当初はよくいじめられた。特に志穂と健は辛辣だった。二人はゼロ歳児から預けられていて、いわゆる保育園のボスだったのだ。純平がレゴで苦心して作ったロボットにわざとボールを当てて壊したり、園庭で理由もなく突き飛ばされたり、足をかけられたりして、生傷が絶えなかった。一生懸命に描いたテレビのキャラクターの戦闘画を志穂に破られたときは泣いてしまった。すると、

「あーあ、女に泣かされた！ 弱虫、弱虫！」と健にからかわれたので、いつも我慢していた純平がこのときばかりは健に怖い顔をして、つかみかかった。さんざん健に殴られ、先生が気づいて、止めに入ったときには、鼻血を出し、唇も切れて、ひどい有様になっていた。そのとき、先生は事情を聴いて、志穂と健を厳しく叱り、破れた純平の絵をセロファンテープで元通りにするよう命じた。

「純平君が一生懸命作り上げたものを壊すのはいけません。大切な宝物を壊すことになるのですよ。宝物を壊されたら、健君、悲しくないの？ 二人とも純平君に謝りなさい」

二人は血で顔を真っ赤にした純平の前に来てそれぞれ謝った。

「大切な絵を破ってごめんなさい」「弱虫って言ってごめんなさい」

先生はセロファンテープでつぎはぎされた絵を見て、感心した。

「純平君、絵が上手だね」

四、五歳のころの子どもの絵は真正面から人間を描くのがやっとなのだが、純平の絵には動きが描かれていたのだ。角度も下から見上げた形で迫力があった。みんなも純平の絵の周りに集まってきた。

「上手だね。戦っている」

「うん、なんか動いてるみたい」

みんなに口々に絵を褒められて、純平は傷の痛みも忘れて、ニコニコした。顔をきれいに洗って、手当をしてもらった純平のところにみんなが集まってきた。

「ねえねえ、ゴレンジャー、描いて！」

「トランスフォーマーもいいな」

「やっぱ、聖闘士セイヤだよ」

いろいろなキャラクターのリクエストをされて、純平は大忙しになった。

先生は保育園に迎えに来た母親に、怪我をさせたことを謝り、付け加えた。

「純平君は本当に絵の才能がありますね。他の子の描く絵とは少し違うと思います。特に動きのある線画はすごいと思います」
「そうですか。家でも鉛筆でよく絵を描いています。一人で長い時間夢中で描いているときもありますよ。外で遊びなさいって言うんですけれど…」
「子どもは一人一人個性がありますからね。外で遊ぶのが好きな子もいれば、家の中でブロックしたり、本を読んだりするのが好きな子もいます。大勢で遊ぶのが好きな子もいれば、一人でいるのが性に合ってる子もいますよ。純平君は絵が大好きみたいだから、その才能を伸ばしてあげたらいいんじゃないですか」
「そうですか。親にしてみれば、外で元気に走り回ってほしいような気もするんですけど…」
先生は純平の絵を持ってきて、母親に見せた。
「この絵を見てください。生き生きとして今にも動き出しそうでしょう？　こんな絵、純平君にしか描けませんよ」
先生に褒められたことがよほどうれしかったのだろう。純平はそれから、以前にもまして、さまざまなアングルでロボット同士の戦いなどを描くようになり、保育園で一目置かれる存在になったことで、いじめられることもなくなった。先生の一言が純平の自分の絵に対する自信につながり、それが職業として漫画を選ぶきっかけになったのかもしれない。

二、サッカークラブ

小学校に上がると、幼稚園で一緒だった子とも、また同じクラスになったが、やはり保育園の仲間である、健や浩二や真人と連れることが多かった。自転車に乗って、駄菓子屋へ行ったり、ゲーム機のある友達の家に遊びに行ったりと行動範囲も広くなった。その浩二と真人が少年サッカークラブに入っていたことと、スポーツを通じて頑強な体を作ったり、いろいろな年齢の地区も違うような子と交わって人間関係を築いていくことを学ばせたいという両親の思いもあって、純平も小学校の三年生のとき、近所のサッカークラブに入った。
純平は根が真面目なので、サッカークラブの練習には休まず通い、夏の合宿にも母親とともに参加したが、相手を倒してでもボールを奪い、勝つという闘志に欠けていたためか、パスを回してもらえず、ボールの周りをヒラヒラ飛ぶチョウのようだった。少年サッカークラブの男の子たちは、幼稚園や保育園の頃からやっている子が多く、監督の家でご飯をよばれたり、泊まったりとまるで家族のような関係で、監督がお父さんで、監督の奥さんがお母さんのように接していた。週末の練習帰りに、純平も誘われて、監督の家に寄ったことがある。みんなで鍋をつつきながら、監督は一人一人に声をかけた。
「真人はシュートが決まるようになったな、いいぞ。浩二はドリブルもう少し練習したら、相手のディフェンス、崩せるぞ」
風呂に入れてもらう子もいたが、純平はその雰囲気に違和感を覚えた。三年生で入ったこともあるが、性格も随分関係していた。純平はどちらかというと、一人で静かに過ごすのが好きだったので、熱血監督のもと汗と涙でがんばるというような図は暑苦しく感じ、どうしても監督の懐に飛び込めず、みんなとも距離があった。監督にも叱られることもな

かったが、可愛がられることもなかった。両親の望むところが分かっているだけに、やめたいと言い出しはしなかったが、サッカーをしていても、楽しいと思ったこともなかったし、両親に試合を見に来てほしくなかった。応援されると、緊張してよけいに体が動かなくなるのだった。だから、学年になっても、レギュラーに入ることはなかった。ただ、サッカークラブに入ったことで、へこたれない根性やみんなと一緒にがんばる協調性みたいなものは身に着いたかもしれない。

絵のほうはどうかというと、教科書の端っこにパラパラ漫画を描いて、みんなに見せたり、クラスの子のリクエストにこたえて、アニメのキャラクターを描いてあげたりして、「漫画の上手な純平君」と言われ、その線画には定評があった。ただ、絵の具などで色をつけると、とたんに幼稚な感じの絵になった。絵具を混ぜて、微妙な色を作って、それを塗って作品を作り上げるのは得意ではなかったのだ。チューブから出した絵具をそのまま塗ってしまうから、絵に深みがなくなってしまうようだった。昔から、人間のタイプには二種類あると言われている。線の人と色の人だ。デッサンの力があって、ものの形を一瞬でとらえ、それを線で表現するのに長けた人と、ものの形より色に関心を持ち、そのものの持つ色を鮮やかに表現するタイプの人だ。純平はどうやら線の人で、色にそれほど興味がないのかもしれない。だから、通知表の図工の成績は五段階評価で五をもらうことはほとんどなかった。

三、漫画への目覚め

純平が小学校四年生の頃、昌子は六年生で、友達の明子や聖子を家に連れてきて、ギャグ系のストーリー漫画を描いていた。三人が順番でストーリーを繋いでいく漫画で、先生をはじめクラスのみんなで回し読みされるほど人気があるようだった。トマトの顔を持ったトマトちゃんが主人公で、みかんちゃんやリンゴちゃんが出てくるかわいらしい漫画だった。純平と妙子も姉たちの横で姉たちの創作漫画を読んでいた。

「早く次が読みたいって催促されるけど、そんなに簡単に描けないよね」

「うんうん、あくまでもかわいいキャラにしないといけないしね」

その様子を見ていた母は昔を懐かしむように言った。

「お母さんも小学校の四年生くらいの時、夏休みの宿題で絵入りの小説書いて、評判になったことがあるわ。担任の先生に後ろの黒板に新しい話、描いてほしいって言われて、黒板いっぱいに字と絵、書いて、連載したな」

子どもたちは目を丸くして、母を憧れのまなざしで見つめた。気をよくした母は鼻歌交じりに、おやつににんじん入りのドーナツをたくさん作って、みんなにふるまった。純平は姉たちが集まって、楽しそうに漫画を描いているのを羨ましいと思った。そのことが契機になり、純平はさらに漫画に対する想いを募らせ、テレビを見ることも減って、時間があれば、一心に漫画を描いていた。はじめは四コマ漫画専門で「落ち」を考えるのが楽しかったが、だんだんとストーリー物を描くようになっていった。両親も純平の漫画好きを応援する気持ちだったのか、その年の誕生日には「漫画家初心者セット」なるものを贈ってくれた。漫画を描くのに必要な画材一式、つまり、ぺん、黒インク、スクリーントーン、紙などの漫画を描く道具と、漫画の描き方という本がセットになっていた。純平は初めて

手にする本格的な画材に胸躍らせた。おもちゃ箱のような画材一式は両親からすれば、お誕生日の単なるプレゼントにすぎなかったのかもしれないが、純平に漫画家になろうという決心を固めさせた運命の宝箱となった。

純平は机に座って、ケント紙を取り出し、コマ割りをしてみる。定規で線を引き、大きなコマと小さなコマを作った。鉛筆で下書きをする。描きたい話は頭の中にあるのだが、どの場面を取り上げて、どうつなげていくか迷ってしまう。どうにか一枚描きあげ、今度はペンでなぞろうとした。黒インクにペン先をつけた。鉛筆やボールペンと違って、ペンは描きにくい。ペン先の角度を考えないとインクが落ちないし、インクの含ませ具合も気を付けないと、ボトッと落ちたり、掠れたりする。ペン描きは失敗して、画面は真っ黒になってしまった。ペンの使い方を練習しないことには始まらないなと自覚した。スクリーントーンも初めて見たのでどう使っていいのか分からなかったが、手元にある漫画本を見ると、バックのほかに驚きやショックなど感情を効果的に表すために、いろいろなところに使われていた。カッターで好きな形に切って、貼り付けるのだ。うまく貼らないと皺が寄ったりしてきれいにつかない。ドキドキしながら、目新しい道具を順番に試していくのが楽しかった。純平は漫画のストーリーを考えるより、まずこれらの道具を使えるようになりたいと思った。母は追加で、関節が曲がる木でできた人体模型と、手の模型も買ってくれた。これらは後々まで、人の体の動きや手の表情を描くとき役に立った。

誕生日を境に、純平は漫画家になるべく、ペン描きの練習をしたり、手のスケッチをしたり、一人机に向かうことが更に多くなった。学校のクラスのだれかを主人公にしてギャグ漫画を描いては、みんなで回し読みしたのだが、みんなが面白がってくれるのがうれしかった。一方で、少年サッカーの練習は続けていた。水曜日の放課後と土曜日、試合の時は日曜日も、近所のサッカークラブの男の子、二、三人と一緒に川べりのグランドまで自転車で行って、日が落ちるまでボールを追いかける日を送っていたのだ。両親の希望に沿いたいと思っていた。

四、中学時代

中学校に進むと、純平はハンドボール部に入った。母はいぶかしがった。

「小学校でサッカーしてたのに、なんでハンドなの？　足から手に代わるなんて、なんか変だね」

純平にしてみれば、小学校からのサッカー仲間とは離れて、新しいことがしたかったのだ。別にサッカークラブの男の子たちとケンカしたわけではないが、べったりとした関係には馴染めなかった。ハンドボールはみんな中学で始めるから、同じ土俵に立てると思ったのもハンドを選んだ理由だった。入ってみると、顧問の先生は怖かった。丸々とした女の先生でいかつい顔でよく怒鳴ったが、みんなに公平で、心配りもしてくれたので、どんなに怒られても、ぼろくそに言われても、クラブの子は誰も傷つかなかった。クラブのみんなは先生の優しさを本能的に嗅ぎ取っていた。純平はそれほど運動神経がいいわけではなかったし、闘争心もあるほうではなかったが、クラブの部員が少なかったので、二年になると、レギュラーに入ることができた。左利きということもあって、左でシュートが打てるので、思いがけない角度でシュートが入ることもあったのだ。

中学生になって変わったことと言えば、音楽を聴くようになったことがある。初めてお小遣いで買ったＣＤは当時人気のあったバンド「イエローモンキー」のベストアルバムだった。「ジャム」という美しい曲が入っているアルバムで、何回も繰り返し聴いた。純平についで、昌子、妙子、母までも「イエローモンキー」のファンになってしまい、家では彼らの音楽がガンガン鳴っていた。母はさっそくファンクラブに入り、ライブのチケットを手に入れた。純平は母と二人で彼らのライブに行った。純平にとってはライブは初体験で、バンドのメンバーがドライアイスの煙とともに、ステージに現れた時、悲鳴に近い歓声と拍手が巻き起こり、圧倒された。最初の一曲からみんな一斉に立ち上がり、曲によって決められた手の振りとコーラスで参加し、大盛り上がりだった。チケットを取るタイミングが遅かったので、二階席の後方の席しか取れなかったので、ステージの彼らは豆粒ほどにしか見えなかったが、異様な熱気に包まれたライブの雰囲気は堪能できた。母は用意してきた双眼鏡をおもむろに取り出し、ときたま彼らの顔や動きを拡大して楽しんでいる。

「純平もこの望遠鏡、貸してあげるから、覗いてみたら？　おもちゃだから倍率低いけど、顔、見えるよ」

望遠鏡なんて持ってこられるはずもないが、訂正するのもかわいそうなので、ときどきその望遠鏡を借りて見た。テレビでしか見たことのない彼らが、今目の前で演奏しているのが不思議だった。

母はそれからも昌子や妙子を連れて、彼らのライブにときどき行っていたようだが、純平の興味は、もっと単純でハードなロックバンド「ヤマタノオロチ」に移っていった。日本の神話を基にした歌詞を金属的な音に乗せて演奏するバンドで、マイナーながらも、若者中心に絶大な人気を博していた。リードギターのテクニックが素晴らしく、ヘッドバンギングと呼ばれる頭を前後に激しく振りながら歌う様はマンガチックでおもしろかった。のちに純平のペンネームとなる「ヤマトタケル」はそのバンドの曲中にに出てくるヒーローの名前である。かなり入れ込んでいたのだろう。

父はハードロックよりフォークやポップスを好んだので、ロックのライブは母と行ったが、山登りなどのアウトドアアクティビティーは父を中心として家族で楽しんだ。

純平が中学生の時、姉の昌子は体躁クラブの合宿でいなかったので、両親と妹の妙子の四人で立山に上ったことがある。室堂を八時半に出発して一の越を越えて、立山の頂上に十時半頃着いた。この時はみんな元気で、美しい景色を眺めたり、余裕で写真のポーズを決めたりしていた。ところが、立山から大汝山、真砂岳と歩いていくうちに、母が体調を崩した。生あくびが出て、何か眠く、吐き気もあって、いわゆる「高山病」の軽い兆候を見せ始めた、道はそれほどきつくないのだが、母は体を動かすのも大儀そうだった。純平と妙子はまだまだ元気だったが、剣御前に三時に着いたときには子どもたち二人も少々バテ気味だった。

その日は山小屋で見知らぬ人ともくっついて、オイルサーディーンのようになって、毛布一枚かぶって眠ることになった。みんな寝込んでいた午前三時頃妙子が突然腹痛を訴えた。かなり痛いみたいで、ウンウンうなっていた。たまたま同室に小児科の先生がいたので、診てもらい、整腸剤と抗生物質を投与してもらうと、少し楽になったのか、妙子は眠りについた。大騒ぎになって眠れなくなった純平が四時半くらいに外に出てみると。満点の星空が見られた。星が落ちてくるようで、星たちがとても近くにあるように感じた。山

に登らないと見られない星たちの輝きに心が震えた。
　五時になると、妙子が急に嘔吐して、またお腹を押さえて「痛い、痛い」と泣いた。小屋の管理人さんが、剣沢警備隊に連絡してくれて、小児科医も状況を説明してくれた。七時頃警備隊の人が来て、妙子を背負って室堂まで下りてくれた。純平も両親もそのあとを追って、室堂に急いだ。純平は妙子が一人ぼっちになって泣いてないか気になって、下りを走り下りて、父に「あぶない！」と叱られた。
　室堂でぐったりとしている妙子を連れて、立山診療所に行くと、虫垂炎の疑いがあるということで、救急車を呼んでくれた。みんなで救急車に乗り込み、途中で救急車を乗り継ぎ、一時間半ほどかけて、県立富山中央病院に着いた。途中、妙子も落ち着いてきたので、安心して、「こんなに長く救急車に乗ることって普通ないよね」と両親が笑ったので、純平もホッとして、救急車の中で眠ってしまった。病院でいろいろ検査をしてもらって、幸い虫垂炎ではなく、腸炎ということで、帰りは、雷鳥に乗って家路についた。
　この登山はみんなにとって忘れられない負の思い出となったが、それにもめげず、家族で山歩きをすることは多かった。アウトドア派の父の影響である。昌子はすぐに音を上げたが、純平はどの山に登っても、いつも軽々と足を運んだ。自然と接する機会が持てたことで、キャラクターの性質や背景を描くときに、深みや現実味を持たせることができるようになったのではないかと思う。

　純平は相変わらず、漫画は描き続けていたが、作品としてかきあげたものはなかった。でも、この頃、さまざまな漫画に出会った。というのは、姉の昌子とお金を出し合って、少年漫画週刊誌を毎週買っていたからだ。「ジョジョの奇妙な冒険」「アラレちゃん」「るろうに剣心」「こちら亀有駐在所」「ジャングルの王者ターちゃん」「ぼんぼん坂高校演劇部」「トワイライトゾーン」「こまわり君」「ワンピース」などなど、リアルタイムで読むことができた。家族はそれぞれお気に入りの漫画は違った。純平は「ジョジョ」、姉は「トワイライトゾーン」、妹は「アラレちゃん」、父は「こち亀」、母は「ターちゃん」だった。なんとなく性格が表れているようでおもしろい。純平はいろいろな漫画のキャラクターやシーンを模写することが多かった。同じように漫画の好きなクラスの女の子、トモちゃんとその模写を見せあいながら、よく漫画談義をしたものだ。トモちゃんは男の子のような子で、いつも「オレ」などと自分のことを呼んでいた。高校になって離れたが、彼女は先生に向かって「教員」と発言し、物議を醸しだしたそうだ。ちょっと変わり者だった。高校生になってからも、時々自転車をすっ飛ばしているトモちゃんを見かけることはあったが、「よう！」って感じの目配せをして、また一心に自転車をこいで過ぎ去るのだった。
　週刊誌では特別読みきりの漫画がときどき載せられたのだが、その中の一つに「ふろん」という漫画があった。学園ものなのだが、クラスの中で存在感がなくなると、体が薄れていって消えてしまうという話で、淡々とした調子で描かれていて、絵もあたたかい感じなのだが、とても怖い衝撃的な一遍だった。
「ぼくもいつかこんな感じの漫画が描けるようになりたい」と強く思った。
　漫画を描くかたわら、自ら進んで入ったハンドボール部もおもしろく、暗くなるまでグランドを駆け回っていた。赤土で汚れた純平の体操服を洗いながら、母は一人ブツブツ言っていた。

「純平のソックス、どうして親指の下あたりだけ丸く汚れるんだろう？」
当の純平も母も長い間首をかしげていたのだが、ある日母が素っ頓狂な声を出した。
「純平！　あんたの運動靴、穴、開いてるよ！　気、つかんかったん？　信じられないわ。それで、この部分だけソックス、丸く汚れてたんだね。なるほど」
母はあきれながら、納得していた。純平はそんな子どもだったのだ。中学生くらいになると、男の子でもおしゃれな子は服装や髪形にこだわるものだが、純平はそういったことに全く無頓着で、放っておくと、寝癖のついたままの頭で学校に行くし、私服もタンスを開けて、一番上にのっているシャツを迷わず身に着けるので、夏場は同じシャツばかり着ていることになった。
中学三年生になると、進学がやはり友達同士でも話題に上った。純平はどこに行きたいという希望もさしてなく、自分の成績で入れる高校に進むつもりにしていた。担任の先生にK高校の環境科なら、推薦で行けると言われ、両親も推薦で行けたら、純平も楽だし、公立なら経済的にも負担が軽いからと乗り気になった。ただし、通知表の体育、図工、音楽など五教科以外の科目も含む全教科の平均が、四・三から四・五くらい必要だと言われた。中三の二学期までの成績が重要だという噂もあって、純平もある程度頑張った。ところが、二学期の成績で、他の科目は四以上あるのに、体育に三がついてしまった。運動部に入ってる生徒は体育の成績で少し優遇されると聞いていたし、校内マラソンでも十位以内にゴールできたし、ペーパーテストでも九十点近くとれたのにである。
母は推薦のことも気になったし、三という成績にも納得できなかったのだろう、担任の先生に電話をかけた。
「どうして三がついたのか説明してほしい」
担任は体育の科目担当の男の先生に尋ねてくれたようだが、母の納得できる答えは得られず、純平の三という数字も変わることはなかった。変わったことと言えば、体育教師の純平に対する態度だった。母の電話に彼はひどく心証を害したらしく、それ以来、純平に対して、嫌味を言ったり、嫌がらせをしたりした。たとえば、バレーボールのサーブのテストのとき、純平の番になると、無視して、きちんとテストを受けさせてもらえなかった。クラスのみんなは体育教師の態度は幼稚で不公平だと純平を慰めてくれたが、教師に逆らうことはできなかった。推薦で進学する生徒が増えて、みんな内申書を気にしていたので、自分への先生の評価を落としたくなかったのだ。
純平は高校生になってから、何かの拍子に体育教師の横暴を母に言った。母は激怒すると同時に、自分の愚かな行動をひどく後悔した。
「先生の気に障るようなことを言ったわたしがバカだった。たぶん教師間ではうるさい母親って言われてたんだろうね。子どもは人質にとられてるようなものだね。何も言えない。成績の数字は先生のさじ加減でどうにでもなるものだし、先生っていう人種は自分の過ちを絶対認めないしね。中学三年の時の女の担任も変だったよね。通知表の備考欄に普通は生徒に対する印象とかメッセージを学期ごとに書くものだけど、二学期、その欄が空白だったから、書き忘れたのかと電話したら、『それは一年間に一回書けばいいものなんです』っていう返事だった。『えっ？』って思ったけど、『そうですか』って言うしかなかった。この人は生徒一人一人に何も関心もっていないんだなって分かったから、何を言っても無駄だから、何も言わなかったけど、後で何か先生間でわたしのこといろいろ言われてたか

もね。非常勤で働いてる学校の先生たち見てても、先生って人格的に優れている人はいないね。本当に優秀な人は企業に行くもんね。お母さんのバカな行動で純平を苦しめてしまってごめんね」

純平は言えば、母は自分のせいだと感じると思い、長い間言えなかったのだ。そういえば、女の担任は、クラスのみんなが文化祭で劇をしたいと言った時も「劇なんて面倒くさいから、展示にしておいて」と言ったことを思い出した。こんな教師の態度は言語道断と言えないのだろうか。不幸な出会いで純平も母も学校の先生に不信感を抱くようになり、先生という存在には失望した。

五、高校時代

高校に進学した純平は文芸部に入部して、文章も書くようになった。文芸部には、自分のイラストや漫画、文章に自信を持った、いわゆるオタク系の自意識過剰気味の生徒が集まり、互いの作品を批評しあっていた。三年の女の部長が一人で仕切っていて、年に一度出す文芸部の出版物の表紙も、その女の部長が自分で描くと決めてしまい、他の部員もあまりにも内向的なので、純平は動きにくかった。クラブの中では同じクラスの真守ということが多かった。真守はコミック好きで、よく二人で漫画喫茶に通った。真守も自分でギャグ漫画を描いていて、純平と使っているインクや紙、ペンなどについて、相談し合ったり、背景のための写真を撮りに行ったりした。橋や電車、鉄橋や川に出かけて行っては、アングルを変えて、たくさん撮った。地元和歌山でコミックマーケットが開催されたときは、二人で覗きに行った。体育館の二倍ほどありそうな大きな会場は、小さなブースに区切られて、ブースごとに漫画を描く人が二～五人集まって、サークルとして参加し、自分たちの描いた同人誌を即売していた。いろいろなブースがあって楽しかった。今流行っているアニメのキャラクターやミュージシャンをもじって、かわいいキャラにするというコミカライズ技法で描かれたものが多くて笑えた。アメリカのロックバンドＫＩＳＳのメンバーが子供になって、泣いたり暴れたりしているのもあった。その他にロボット物、バトル物、ＳＦなどの様々なカテゴリーの漫画が並べられていたが、なかでも男同士の恋愛を扱ったものが多く、だいたい女の人が描いていて、買っていくのも女の子というのが不思議だった。様々なジャンルの同人誌が所狭しと並べられ、人気のブースでは完売の札がかかっていた。いかにも汗臭いバッグパックを背負って、タオルを巻いたオタクさんたちをはじめ、さわやか系のカップルや、コスプレのお姉さんたちの熱気でムンムンする会場で、純平も真守も熱くなっていた。純平が興奮気味に言った。

「すごいね。人がいっぱいだ。僕もブース借りて、同人誌、売ってみたいな」

「ああ、何かぼくにもできそうな気がしてきたよ」

真守も目を輝かせている。二冊ずつ同人誌を買って、家に帰り、純平はさっそく作品作りにとりかかった。有名な漫画のパロディーなら簡単かと思ったが、キャラがなかなか動きださない。パロディーといえども、しっかりとしたストーリーが必要だと感じた。真守もロボット物に手こずっていたが、次のコミックマーケットまでに、小さな作品をいくつか完成させ、コピーして、綴じて冊子にした。コミックマーケットにはサークルとして参加し、ブースを借りて、自分たちの冊子を二十部平らにに並べて売った。半分売れたので、

二人は飛び上がらんばかりに喜んだ。
「やったな！」
「おお！」
「達成感！」
「純平、おまえ、まじで漫画家になるつもりか？」
「なりたいと思ってるよ。でも、どうしたらなれるか分からないんだよ」
「京都に漫画専門の大学、あるみたいだよ」
「うん。でも、下宿で私学は、うち、無理なんだ。うちのルールは、下宿するなら国公立」
「厳しいな」
「うち、三人兄弟だろ？　みんな平等に教育を受けさせたいと思ってるみたいだけど、経済的にそれほど余裕ないからね。そんなルール、思いついたんだろう」
「そうか。俺、経済学部に行こうと思ってたけど、文系だと、大学卒業しても、就職きつそうだし、理系にかえようと思ってる。情報処理系なら仕事ありそうだしな」
「文系から理系は難しそうだね」
「まあな。でも、まだ二年生だから…」
「東京に行くのか？」
「ああ、親元を離れたいんだよ。俺、一人っ子だろ。過保護っていうか、親が干渉しすぎで、ちょっとしんどいんだよ。自由になりたいんだ。一人っ子だから、経済的には問題なさそうだしさ」
「僕も関東に行きたいな。東京近辺のほうが出版社とか多いから漫画情報も多いはずだよね。でも、本当は大学へ行く意味が分からないんだ。父は男は大学の理系に行かないとだめだっていつも言ってるけど」
「純平の両親って、純平が漫画描くの応援してくれてるんじゃなかったのか？」
「うん、趣味としては認めてくれてるけど、漫画家という仕事に就くのは無理だと思ってるみたい」
「専門学校もあるだろう？」
「あるけどさ。そんな学校に行ったって、漫画家になれる保証はないよね」
「そうだね。保証はないけど、基本のテクニックとか教えてくれるんじゃない？　漫画家になる特別ルートとか持ってないのかな？」
「基本のテクニックって、コマ割りの仕方とか、ペン入れの前の下書きのネームの作り方とかはもう分かっているっていうか、自分で考えるしかない部分だと思う。誰に相談したらいいのかな？　先生も知らないだろうしね」
「まず、親を説得しないとダメじゃないのか？　大学に行くとしても、文系に行きたいんだろ？　お父さんの考えとはずいぶん違うよ」
「そうだね」
　クラスの友達の達也と祐介も進路についていろいろ考えていた。達也はお父さんの出身校である信州にある大学の理学部に行きたいようだった。達也はポッチャリした頬を赤らめながら言った。
「信州ってきれいだろ？　父親も進めるし、冬はスキーもできるしさ。俺の家族、スキー好きだからいいかもって…。軽いかな？　動機が」

「いいんじゃない？　両親も賛成してくれるだろうしさ。俺は父が市役所に勤めているだろ。父もよく言うけど、俺もやっぱり生活の安定が一番だと思うよ。大学へ行ったところで、卒業しても、就職浪人とか多いみたいじゃない？　高卒で地方公務員試験、受けたほうが大卒より受かりやすいしさ。俺はそっちのほうに行こうと思ってる」
純平は感心する。
「祐介って現実的だな。何か大学で勉強したいこととかないの？」
「大学ってさ、社会に出るまでの猶予期間って感じがする。別に特別何か勉強したいっていうんじゃなくて、もう少し社会に出るの遅らせて、遊びたいから大学に行くケースが多いんじゃないかな」
「そんな人も多いだろうけど、しっかりした目標、持って、進学する人のほうが多いと思うな。それに、猶予期間も必要かもしれない。大学で学ぶのは教科だけじゃなくて、もっと人間を豊かにしてくれる栄養みたいなものが得られる気がするな。言いにくいけど」
「で、純平はどうするの？」
「ぼく、漫画家になりたいんだ。だから、僕にとっては、大学に行く時間、無駄だと思うんだよ」
それに対して、祐介は決めつけるように言った。
「夢は分かるけど、実際問題、どうなの？　言っちゃ悪いけど、イラストなら純平くらい描けるやつって、掃いて捨てるほどいるだろ？　ストーリーが問題だよね。高校出て、なんのは人生経験もない人の描く人間像って、浅くならないのか？　単純なバトル物だったら、いけるかもしれないけど…。どんな漫画、描きたいの？」
「青春物っていうのかな。ほのぼのとした思春期の葛藤みたいな…」
「そんなテーマ、今の時代の読者は望んでる？　受けると思う？」
「分からない。でも、戦闘物ばかり読みたいとは思わないだろ？」
「最初からマイナーな読者、狙うのか。で、どうしたらなれるのさ。漫画家って」
「はっきりとした道はついていないから、出版社の懸賞、例えば、「手塚賞」とかに応募して佳作くらいに入ったら、読み切りに載せてくれることもあるかもしれない。そのあとは分からないよ」
「きついだろうね。おやじさんがどう言うかな？」
「さあ？」

両親を前にして、純平はいつになく緊張していた。
「そろそろ進路を考えないといけない時期に来てると思う。僕はプロの漫画家になりたい。だから、大学に行く理由がないような気がします」
「プロの漫画家ってどうしたらなれるの？」
「確実になれる道なんて、だれにも分からないんじゃないかな。少年誌で募集している賞に応募して、優秀だと認められたら、編集者のほうからアプローチがあるようです」
「家でずっと応募作品を描いているのか？　賞が取れるまで」
「同人誌を作って、コミックマーケットで売っている漫画家の卵もたくさんいます」
「大学に進学しても、漫画は描けるでしょう？　大学生活やキャンパスでの人間関係とか、卒論を書くときの苦労とか、経験したものはいつか漫画のネタになるから、無駄にならな

いと思うわ。むしろ普通の仕事に就いて、ある程度働いてみたら、その苦労もネタになるよ。体験しないと、説得力のあるものは描けないんじゃないの？　もちろんＳＦとかは体験で描くものじゃないから、科学系の本をたくさん読まないといけないかも知れないけどね」
「僕には大学生活の四年という時間、その間の学費、やりたくもない勉強をする労力はもったいないような気がします」
「文学部に進んだら、小説、読んで、分析したりするんじゃないの？　本の内容を掘り下げることもストーリー作りには役立つと思うんだけどな」
　母は一応プロの漫画家になることを踏まえたうえで、大学で学ぶことがプラスになるのではないかと言っていたが、父は職業として漫画を描くことに反対した。
「懸賞に応募して何か賞をもらっても、それを仕事にするには大手出版社の出す少年誌で連載をもらわないとだめだろう？　連載が決まっても、人気がなくなると、打ち切られる。すべてが不安定な状態だ。生活はできるのか？　やはり男は理系学部に入って、院も出て、一流企業に就職して、開発などの仕事に携わるべきではないのか？　文学部なんて出ても、何の仕事にもつけやしない」
　父の厳しい言葉に母が反論した。
「好きでもない理系科目を四年間も勉強するのは苦痛でしかないんじゃない？　大学では、就職に有利とかじゃなく、本当にやりたいことをやらないと、もったいないわ。何が就職に有利かなんて、四年後には変わっていることもあるし…」
「おまえは女だから、そんな暢気で無責任なことが言えるんだ。現実はそんなに甘くないぞ。まず、自分の生活を自分で支えていかなければならないんだ。家庭を持つなら、もっと安定した収入が必要なんだぞ」
「純平は結婚は考えてないと思うわ。自分のしたいことをして、つまり、漫画を描いて、かつかつでも生きていければ、幸せなんじゃない？　それでいいと思うわ。　あなたは一応一流企業でがんばってるけど、幸せなの？　結婚当時は残業残業で、妙子が生まれてからは、転勤に次ぐ転勤。上司とは馬が合わなかったとかいろいろあるんだろうけど、もう十五年ほど単身赴任の母子家庭状態が続いているのよ。定年まで転勤が続くみたいじゃない？　それで、幸せなの？」
「俺が頑張ってるから、おまえたちが食っていけてるんだろ？　俺が自分のやりたいことやってたら、干上がるだろ？」
「だから、自分のやりたいことがある人は結婚なんて選ばないのよ。自分が生活できればいいっていうスタンスで生きてるのよ。純平はそっちを選ぶって言うんでしょ？　純平の人生なのよ。選ぶ権利は純平にあるわ」
「じゃ、期限を切ってくれ。三十までがんばっても、芽が出なかったら、漫画家になるのは諦めろ。三十過ぎてからの就職は難しいだろうがな。いつまでもずるずる夢を追いかけてるわけにもいかんだろう？」
「お父さんとお母さんの言いたいことは分かりました。僕はどうしても、漫画をあきらめることはできません。だから、出版社が多くて情報も得やすい関東に行きたいんです。東京周辺の国立大学の文学部、目指してこれから、がんばります。四年間はバイトもして、生活費は何とか自分で稼ぐつもりです。奨学金も借りることができると思いますが、学費

はお願いしてもいいですか？」
「分かった」
一応そういうことで落ち着いたが、父はことあるごとに、母の無責任な発言のせいで、純平が理系をやめて、妙な方向に行ってしまったとなじっていた。母はそれで、めげるような人ではなかった。「やりたいこと、やらないとね。人生、一回きりだし、短いよ」と口癖のように言っていた。
進路もほぼ決まったとき、純平の所属している文芸部でうれしいことがあった。その年の表紙を純平が担当することになったのだ。前の部長が卒業してから、文芸部も少しずつ風通しのよいクラブになりつつあった。みんなの意見が取り入れられる方向に変わったのだ。部長が純平のクラスのまどかになったことも大きい。まどかは毎年出版する文芸部の冊子を、詩、小説、四コマ漫画、十ページ程度のストーリー漫画、イラストなどに分けて、部員全員に作品を二つずつ出すよう提案した。メンバーはみんなやる気になって、期日までに二つの作品を仕上げて持ち寄った。お互いに批評しあって、直すところは直して再提出した。純平は四コマ漫画と短編小説を提出して、小説は時間軸が飛びすぎて分かりづらいから、もう少し整理して分かりやすくしてほしいという要望を聞き入れて、手直しした。表紙は高校生のカップルが仲良く勉強しているような温かい感じのものを出して、みんなに見てもらって、ＯＫをもらった。三年間の集大成として、満足のいく冊子が作れてうれしかった。
三年の夏休みも終わると、クラスメートたちも、各々自分の進むべき道を見つけ、センター試験や選択科目の勉強に明け暮れていた。そして、その年も暮れようとしていた。大手の塾では年越しも塾で勉強して過ごすのを売りにしていた。純平たちのクラスは特別科なので三年間いっしょのメンツで過ごしてきたからみんなかなり仲がいい。大晦日、お寺の娘のまどかのところに集まって、除夜の鐘を突かせてもらうことになった。夜の十時ごろ純平は真守と達也と祐介を誘って、まどかの家に行くと、十人ほどもう集まっていた。
「寒いな。何してるの？」
「年越しそばの準備よ。あったかいおそば、食べたいでしょ？」
まどかは張り切っていた。
「純平君もそこのネギ、切って！」
「ネギ？　どのくらいの長さに切るの？」
「どのくらいの長さって、小口切りよ。なるべく細かく切るのよ。できる？」
「できるよ」
「うわっ！　左利きか。あぶなっかしいな」
「左利きは器用なんだよ。ほら、上手だろ？」
「まあまあね。あっ、真守君、かまぼこ、厚く切りすぎよ」
「ごめん、ごめん。何人、来るの？」
「えーっと、二十八人かな。塾行ってる子もいるし、家族と初詣する子もいるからね」
「出汁のいいにおいがするね。おいしそう」
達也も祐介も鼻をクンクンさせている。みんな揃って「いただきます！」
と言ったのは、十一時を少し回っていた。
「おいしい！　あったまる」

「かつお出汁が効いてるね。まどかが作ったの？」
「出汁はお父さん。うちのお父さん、料理上手なのよ。男子もうどんやそばくらい作れないとね」
「まどかん家のお父さん、優しそうだな」
「あら、純平君のお父さん、厳しいの？」
真守が代わりに答えた。
「こいつん家、半端じゃないよな。おやじさん、きついよ。下宿するなら国公立。三十までに漫画家になれなかったら、漫画やめろだもんな」
「アシスタントで背景、描いて、漫画に携わって生きていくって方もあるのにね」
まどかもなかなか漫画に詳しい。
「あれっ？　まどかって漫画描くの？」
「好きなんだけど、イラストぐらいしか描いたことないな。でも、憧れてるから、いろいろ知ってるよ。三十までに漫画家になれって、ちょっときついよね」
「でも、人間にはどっちかを選ばなければならない時っていうのが必ずあるから、お父さん、そんなに間違ったこと言ってないんじゃない？」
祐介は純平の父親の肩を持った。
「そうかもしれない」
純平は小さくうなずいた。
そばを食べ終わったみんなは、大きな鐘の前に一列に並んで、除夜の鐘を突く準備をした。思いっきり体重をかけて突かないと、いい音が出ない。ワイワイ言いながら、一回ずつ突かせてもらった。後は若いお坊さんが渾身の力を込めて突いていた。鐘の音の深みが違うような気がした。ゼロ時になると、まどかのお父さんが読経を唱えはじめたので、みんな座って、手を合わせた。あるものは志望校合格を願い、あるものは健康、平和を願った。そして、空いている部屋で雑魚寝をして、朝早く解散となった。センター試験を控えた現実の世界に子供たちは戻っていった。
まどかは卒業してからも、年賀状や暑中見舞いなどに、近況を書いて送ってくれた。そこにはいつも漫画家を目指す純平への励ましの言葉が添えられていた。

六、大学入学

純平はめでたく志望校のC大に合格し、千葉に下宿することになったので、家を出た。気丈な母は駅でも涙を見せなかったが、「もう戻ってこないと思ったら、とても寂しかったよ。大概大学で下宿するために家を出るときが親離れのときだからね。純平にとって、親の家は実家になって、帰るときは帰省になるんだもんね」と後になってしみじみ言っていた。純平は家族と離れて生活することに不安を感じていたが、真守も東京に下宿すると聞いて、心強く思った。
大学へ入った純平は、不便さと寂しさと引き換えに自由を手に入れた。今まで経験したことのない感覚だった。小さなアパートの一室だが、自分だけのスペースができた。何時に起きようが、何を食べようが、何をしようが、誰にも干渉されることのない自分のお城だ。その感覚を楽しんでいた。

サークルはたくさんあって、入学式のときもあちこちから声をかけられた。テニス同好会、落語研究会、漫画研究会などあった。漫画研究会には心を惹かれたが、サークル発表でマンドリン部の見事な演奏に感動した。小刻みにピックを動かしつつ、流れるようなメロディーを奏でる楽器演奏に初めて触れて、入部を決めた。聞けば、C大のマンドリンクラブは伝統ある由緒正しいクラブで、他のサークルとは一線を画し、練習はかなり厳しいらしい。毎年年末には定期演奏会を催していて、OB、OG、父兄の方々までたくさん聴きに来るそうだ。

純平はサークルの一員として頑張った。マンドリンという楽器も初めて手に取った。左利きのマンドリンがなかったので、利き腕ではない右手で小刻みなピックさばきを会得しなければならなかった。幼い頃、音楽教室に二年ほど毎週通ったが、弾けるのはゴジラの登場でおなじみの「ダダダッ、ダダダッ、ダダダダダダダラダッ…」くらいで、楽譜も読めず、なかなか苦労した。まず、指が動かないのだ。細かく動かさなければならないのに、それができず、荒い音しか出てこなかった。苛立つ純平を先輩が励ました。

「初めてマンドリンやる人はだれでも指が思うように動かないよ。慣れてくるから、焦らないで練習したらいいよ」

先輩がきっちり指導してくれたおかげで、少しずつ曲らしいものが弾けるようになると、うれしかった。マンドラというマンドリンよりも少し大きめで低い音を出す楽器を受け持つことになり、アパートにも持って帰り、練習した。帰省した時も持ってかえったので、両親はびっくりしていた。

「純平が音楽やるなんて、信じられないわ。しかも、マンドラ！　ギターとかじゃなくて、マンドラ！　マンドリンといったら、チリチリチリって細かい音出す楽器でしょ？　渋いね」

母は純平がサークルに入って、みんなと仲良くやっているのがうれしいようだった。

夏はサークルの合宿にも参加し、寝食を共にしながら、練習に励んだ。午前中三時間、午後は四時間というハードなもので運動部なみのノリだった。しかし、夜は海辺でバーベキューをしたり、花火をしたりして、先輩とも同期の連中とも親しくなった。初日の夜、先輩たちは新入生一人一人を海に放り投げた。

「ギャー！」「やめて！」という悲鳴とともに新入生たちは服のまま、海にズッポリ浸かることになった。それが、新入生の歓迎の儀式でもあるらしかった。みんなびしょ濡れになったけれど、笑顔がこぼれ、純平も大学生活の醍醐味を味わった。大学生活の前半が充実するかどうかは多分入ったサークルで決まるのかもしれない。家を離れたこともない、友達と旅行にも行ったことがない、どちらかと言えば、内向的なオタク系の純平はサークルを通していろいろな人と親しく交わって青春していた。

純平はサークルに力を入れていたが、一方で本もたくさん読んだ。恩田陸、乙一、大槻ケンジなどに惹かれ、次々読み漁った。ちょっとふわっと不思議な感じの文章に惹かれた。登場人物たちの不安定な青春を描いているところにも、共感した。それらとは全然テイストの異なる「封神演義」などという中国の古典にも興味を持って、苦労しつつ読み切った。本を読むことは漫画を描くうえで、大いにプラスになったと思う。読者の取り込みや、ストーリーの展開、終末への流れなど参考になることが多かった。

大学に入ってバイトなるものも経験した。初めてのバイトは土曜日と日曜日にスーパー

の肉売り場で肉の量り売りをするものだった。ミンチ肉やバラ肉を二百グラム、三百グラムと注文されても、なかなかグラム数が合わせられず、焦ったが、しばらくすると、慣れてきた。ただ、精肉部の責任者のおじさんには疎まれた。

「大学生が小遣い欲しさにバイトしてんだろ？　お気楽なもんだ」

学歴がないせいで苦労してきたのだろうが、まじめに働いても、認めてもらえないのは辛かった。もちろん一生スーパーで働く気はないから、腰掛的なものになるのは仕方ないと思うのだが、おじさんはそんな働き方が気に障るらしかった。土、日が拘束されるのにも支障が出てきたし、とても居にくい雰囲気だったので、二か月ほどで、やめてしまった。辞めたい旨を言いに行ったとき、それみたことかというような言葉を投げつけられた。

次に見つけたバイトは豆腐料理の専門店のウェイターだった。週末はサークル等で忙しいので、平日の三日間、夜の六時から十時まで働いた。その店は客層もよく、時給もそこそこよかったし、スタッフがみんな若くて、働きやすかった。月に四、五万にしかならなかったが、父に生活費は自分でなんとかすると言った手前、続けられるバイトが見つかって、ホッとしていた。

漫画に関してもかなり進展があった。東京のコミックマーケットに参加したのだ。以前コミックマーケットで知り合った三人と一冊の本を仕上げ、製本してもらって同人誌「サイン」として販売した。メンバーの最年長は三十五歳の龍次さん。本業はウェブデザイナーとかで、かなり忙しい中、シリアス物のパロディー漫画を描いている。奥さんもいるが、共働きなので、生活はできているらしい。あまりしゃべるほうではないが、時々的確なアドバイスをし、要所要所でみんなを引っ張ってくれるので、メンバーは龍次さんを頼りにしている。ニヒルなイケメンでいつも黒ずくめのファッションで決めている。二人目は三十二歳の隆也さん。売れっ子漫画家のアシスタントをもう七年もやっているベテランで、背景を描かせたら、ぴか一と言える。同人誌の売り上げも含めると、年間八百万ほど稼いでいるようだ。本人はずっとアシスタントで食べていくつもりらしく、「俺にはストーリーは作れないから、画力だけで勝負するしかないんだよ」とよく言っている。長髪を後ろで束ね、黒縁の眼鏡をかけ、薄汚れたTシャツとジーンズ姿でたばこをふかしている横顔は寂しげだ。彼は広島に住んでいて、純平は彼とはネットのサイトで知り合った。純平は自分のイラストをみんなが見られるサイトに投稿していた。それを見た人が十点満点で点数をつけて、毎日ランキングが出される仕組みになっていた。純平の絵は投稿し始めて一か月くらいで上位に名前が載り始めた。隆也さんはその前から上位にランキングされてて、お互いに面識はないものの、メイル等で近況や互いの絵についてのコメントを交換する仲になった。広島の隆也さんのアパートに遊びに行って泊めてもらったこともあった。顔も知らない人の家に行って、しかも、泊まるなんて、純平は自分でも驚くような行為だが、自然にそうなったのだ。隆也さんの部屋の壁には彼が自分で撮ったという美しい日本の風景の写真が飾られていた。花や草、虫、鳥、動物、川や家並みをはじめ、エネルギーにあふれる祭りや、漁師さんたちや道路工事の人やガードマンなど働く人々をとらえた写真もたくさんあった。

「すごいですね。写真の量も半端じゃないけど、アングルっていうのかな、絵葉書とは違う美しさがありますね。隆也さんはこれらを絵作りに生かしてるんですか」

「やっぱり観察しないとね。嘘の線になってしまうでしょ？　まだ二十代の頃は、これら

の写真で気に入ったやつを鉛筆で模写していたよ。そのうち人の体とか見なくても描けるようになった。背景が得意なのも写真のスケッチのおかげかもしれないね」
「自分で漫画描かないんですか？　もったいない気がするけど…」
「描いたこともあるよ。みんな褒めてくれたよ、絵はね。だけど、ストーリーについては何のコメントもない。自分でも平凡っていうか光る部分がないような気がしてね」
「平凡じゃダメなんですか？　プロの漫画の中でも普通のいっぱいあるじゃないですか？」
「あることはあるよ。でも、そんな漫画の一つになっても意味ないよ。どうしても描きたいもの、描かずにはいられないものが見つからないんだもの。自分をさらけ出しても描きたいものっていうのかな。小説でも同じだと思うけどね。創作っていうのは、自分の魂を削って形に表していくべきだと思うよ。俺にはそれができない。残念だけど…」
「漫画を描くって覚悟が必要なんですね。画力だけではどうにもならないんだ」
「投稿サイトで絵を認められて『絵師』などとおだてられても、漫画家になれるわけではないんだよ。もし、なれて、連載がとれても、すぐ打ち切りになってしまいかねない。何人も俺の周りにいたよ。そういうやつ」
　二人で夜遅くまでスルメをかじりながら、焼酎をすすり、真剣に漫画について語り合った。純平は隆也さんから、漫画を生業にすることの厳しさを学んだ。
　もう一人は二十歳の芳雄君。漫画の専門学校に在学中で、いかにもオタクという風貌だ。太目で汗かきでよく食べた。純平の近くに住んでいるので、ちょくちょく飲みに行って、漫画談義をした。芳雄の専門学校は割と有名で、ゲームソフトのキャラクターなどをデザインする人を輩出していた。芳雄は見かけによらず、真面目で、きれいな線を描いた。いろいろな雑誌の懸賞に応募しているようで、各雑誌の好む傾向など分析している。
　この三人と一緒に作った「サイン」は八十部ほど売れた。その後も「サイン2」「サイン3」と作り、コミックマーケットのブースで販売したが、龍次さんに赤ちゃんが生まれたり、隆也さんのアシスタントの仕事が忙しくなったりしたことから、四人のサークルは解散することになった。龍次さんはこれを機に、漫画から足を洗って、安定した生活を目指すらしい。彼の最後の一言はこうだった。
「みんなと同人誌、作って売って楽しかったよ。各々違った才能持ってると思う。うまく見極めて進んでほしい。漫画を諦めるのも一つの選択肢だと思う」
　隆也さんは残った二人を励ますように言った。
「二人とも若いしやれるだけやればいいさ。まだまだ人生はじまったばかりだろ？　いろいろ試してみるさ」
　芳雄は龍次さんの言葉を重く受け止めた。まだまだ若いし、懸賞などにも挑戦していたのに、散々悩んだ末、実家のクリーニング店を継ぐ決心をして、静岡に帰った。父親の指導の下、日々クリーニングのノーハウを学んでいるらしい。どうやら、父親の体調がよくないらしい。四年前に手術した肺癌がまた再発したようで、抗癌剤治療が始まるので、長男である芳雄も放っておけない状態のようだ。同人誌は趣味として続けたいので、同じようなスタンスで漫画と向き合ってる仲間を見つけると言っていた。芳雄の気持ちを考えると、安易な励ましの言葉は出てこなかった。「しっかりお母さんを支えてあげるんだよ」と

しか言えずに別れた。芳雄の中では納得できていたのか、笑顔で「はい、僕にはそうするしかありませんから」と手を振った。

純平は同人誌の仲間を失って寂しくなった。一人になって、進路を迷いながらも、漫画賞への応募を続けていた。佳作に入ることはたびたびあったが、入賞まではなかなか行けなかった。そんなとき、大手出版社の「少年ステップ」の懸賞に応募して月例賞に選ばれて、少し明かりが見えた。サイトへの絵の投稿も続けて、人気投票で一位に輝き、「東方の絵師」と呼ばれるようになっていた。

七、貴子との出会い

大学の三回生になると、マンドリンクラブでマンドラのバンドリーダーになり、それなりに忙しくなった。マンドラはメンバーが少ないし、真面目さを買われて、選ばれたのだろうが、演奏技術はそれほど高くないので、辛い部分もあった。更に定期演奏会の企画全般も任された。ＭＣや照明なども含め、進行の詳細をコントロールしなければならない。いろんな人を動かす立場になるから、かなりストレスを感じた。純平とともにマンドリンのバンドマスターの貴子も企画係になったので、二人で打ち合わせを何回もすることになった。貴子は幼い頃からピアノを習っていたので、楽譜も読めるし、マンドリンも上手で、純平とは違って、アグレッシブな女の子だった。純平はいつも彼女のパワーに押されながら、物事を決めていくことになった。

定期演奏会を一か月後に控えた十一月の下旬、その頼りになる貴子がノロウィルスにやられた。進行のＭＣを貴子の部屋で決めていたとき、貴子がいきなり戻した。それも次から次に大量に戻した。

「ごめん」と言って、トイレに行く間もないほど突然だった。熱は七度代だったが、グッタリとしていた。純平がオロオロと吐しゃ物の始末をしていると、貴子は倒れそうになりながらも、純平に指示した。

「ノロウィルスは感染力が強いから、ゲロがついた服は塩素を使って洗わないといけないのよ。純平、早く帰って服を着替えて！　ここにいると、移るかもしれない、というか、もう移ってるかもしれないけど。手をしっかり洗って、うがいもしてお風呂に入るのよ。今来てる服は漂白剤につけておいてから、洗ってね。それから、悪いけど、スポーツドリンク、買ってきてくれる？　吐き気がおさまったら、少しずつ飲むわ。脱水症状になったらやばいでしょ。ごめんね。忙しいときに」

「いいよ。じゃ、スポーツドリンク、買ってくるからね」

「ありがとう」

貴子に早く帰るように言われたが、病人をおいて帰るわけにもいかず、一晩貴子の部屋に泊まってしまった。貴子の心配通り、ノロウィルスの感染力は強く、次の日には純平も戻し始めた。二日ほど二人でゲロゲロしていたが、出すものを出してしまい、スポーツドリンクをチビチビ飲みながら、寝ていると、だんだんと元気になり、食欲も出てきた。なぜか二人とも食パンが食べたくなったので、コンビニで買ってきて、トーストにして食べたら、とてもおいしかった。幸いいいお天気になったので、窓を全開にして布団を干し、シーツや枕カバーや衣類は漂白剤につけた後、洗剤で洗った。貴子はこんな状況になった

ことをひどく気にしていた。
「ごめんね、純平。学校まで休ませちゃって…」
「仕方ないよ。貴子のせいじゃないよ」
「さあ、エンジンかけて、はじめの挨拶の文句や曲順、アンコール曲、決めないとね」
「しっかり詰めておかないと、本番が心配だよね。ＯＢとか親とかも聴きにきてくれるからね」
「純平のご両親も来るの？」
「うん、遠いからいいよって言ったけど、和歌山から出てくるって」
「そう、よかったね。わたしのところは、父は忙しいから来られないけど、母と五つ上の姉が来てくれるみたい。姉はマンドリンはしてないけど、ピアノは小さいころから習って て、今は結婚して家で教えてるの。わたしと似てるってみんな言うわ」
「お姉さん、音楽のプロじゃないか。気合入れて、企画書き上げて、マンドリンの演奏も恥ずかしくないよう完成させないとね」
「ええ、がんばりましょう」
　純平と貴子はノロウィルスをきっかけになんとなく付き合い始めた。定期演奏会に関連して、二人でいる機会が多かったのだ。貴子はリーダーシップがあって、みんなをグイグイ引っ張っていく。言い方が率直すぎて、少々きついときもあるが、見かけによらず周りに気を配れるタイプだった。部員の一人一人の様子を観察し、演奏がうまくいかず、凹んでいる子をそれとなく励まし、適切なアドバイスを与え、逆に調子に乗ってる人には厳しい指摘を飛ばし、沈んでいる部員の相談に乗ったりしていた。そんな貴子を見るにつけ、純平は貴子ってすごいなと感心するのだった。しかも、料理も上手だった。純平の部屋に来て、冷蔵庫に卵としなびたネギしかないのを見て
「何？　この冷蔵庫！　何も入ってないじゃん」と言いながら、作ってくれたネギチャーハンはとてもおいしかった。
「貴子って料理も上手なんだね」
「これ、料理って言えるんかな？　純平、しっかり食べないとだめよ。これ、食べたら、買い物に行こう！」
　二人は揃ってスーパーに出かけた。
「今日、ちらしずしとお吸い物とお刺身にしよう！」
「ちらしずしって面倒じゃないの？」
「あったかいご飯に混ぜるのがあるから。あと、錦糸卵、焼いて、エビといんげん茹でて、トッピングしたらいいんだよ」
　貴子は買い物カートにポイポイと食材を放り込んでいく。
「牛乳や食パンも買っとかないとね。純平が餓死しないようにね。ほかにすぐ食べられるようなものもね。米とかマヨネーズ、マーガリン、あるの？」
「お米はあるけど、マーガリンとマヨネーズは二年ほど冷蔵庫に入れっぱなしだよ」
「うへっ！　賞味期限切れてるよ。きっと酸化しちゃってるから捨てないとだめよ。じゃ、マーガリンとジャムとマヨネーズ。それから、ツナ缶、納豆、豆腐にバナナにトマト…」
「トマトはやめて！　僕食べられないんだ」

「トマト嫌い？　栄養あるのにな。じゃレタスにしよう」
　手際よく買い物を済ませ、純平のアパートに戻って、貴子はちらしずしを作ってくれた。小さな折り畳みテーブルを出して、二人で向き合って晩御飯を食べていると、純平はなんか照れくさくて、やたらお茶を飲んだ。
「お、おいしいね。この部屋で一人で食事していると、何か生きるためのエネルギーの補給してるようで、味気ないけど、二人だとおいしいね」
「まっ、わたしの腕がいいってのもあるけどね」

　そして、いよいよ定期演奏会の当日がやってきた。純平も白いカッターシャツに紺のズボン、赤っぽいネクタイで臨んだ。純平は緊張のあまり、小さなミスを重ねたが、演奏会自体は進行表通り進み、アンコールまでつつがなく終了した。最後にステージに全員が登場し、お辞儀をすると、いつまでも拍手が鳴りやまなかった。純平は大役を果たし、ほっとして、ロビーで聴きに来てくれた客さんに挨拶をしていたら、父と母がニコニコして近づいてきた。
「すばらしい演奏だったね。お客さんもたくさん入って…。ビッグイベントなんだね」
「楽器なんて幼稚園以来触ったことのない純平がみんなと合わせて、あんなすばらしい演奏をするなんてね。マンドリンの音色って優しいね。揃うとやっぱりダイナミックだし」
　純平が両親と話していると、貴子が笑顔で近づいてきた。純平が貴子を紹介した。
「貴子さんはマンドリンのパートのリーダーで、今回の演奏会の進行とか一緒に考えてくれたんです」
「はじめまして、南出貴子といいます」
「純平がいつもお世話になっています」
　母は二人の間に何か特別な空気があるのを感じながら、うれしそうに挨拶した。
「打ち上げとかあるんでしょ？　楽しんで来なさい。わたしたちは駅前のビジネスホテルに泊まって、明日ここら辺少し観光して帰るからね」
　母はそう言って、父に目くばせをした。父も口を合わせる。
「関東に来ること、あまりないからね。公園とか博物館とか寄って帰るよ。純平も元気そうだしよかった。いい演奏きかせてくれてありがとう」
　純平と貴子は仲良くクラブのみんなの輪の中に入っていった。母は父に言った。
「貴子さんとお付き合いしてるみたいですね。明るくてしっかりしたお嬢さんでよかった」
「えっ？　そんなこと言ってたか？」
「言わなくても分かるでしょ？　鈍いんだから…。純平に初めてできたガールフレンドですよ、きっと」
　父は頭を掻き掻き、笑った。
「それはめでたいな」

　定期演奏会が終わると、三回生は一足早く退部することになり、純平は貴子とサークルで何かするということはなくなったが、二人はよく会った。映画を見に行っては

お互いの感想を語り合った。
「あの映画、きれいな女優をきれいに撮ることにこだわってるね」
「そうかな。きれいな女優さん、体張って、頑張って不倫とかに巻き込まれてたじゃない？」
「ありえない状況だよ。後半は観客を泣かせよう、泣かせようとする意図が見え見えだったしさ。あざとい韓国映画みたいだ」
「それはちょっと意地悪な見方だよ。感動的だったじゃない？　みんな周りの女の人、泣いてたよ」
「感情移入したんだろうね」
　またクラシックやロックのライブにも出かけた。貴子はロックはあまり好みではないようだったが、純平の好きなクラシックを取り入れたプログレッシブロックには興味を示した。印象派や現代アートの展覧会にも二人で足を運び、自分の一番のお気に入りの作品を披露しあったりした。
「純平は何か妙な絵がすきなのね。わたしはやっぱり具象の絵のほうが好きだな。分かりやすいし、素直にきれいだと思うわ」
「きれいな絵もいいよ。心が落ち着くし。でも、何か作者の強い意志みたいなものが伝わってくるような絵もいいよ」
「そうかな？」
「そうだよ」
　二人の意見は時々合わないこともあったが、それはそれでおもしろかった。たまには純平のアパートに来て、二人で鍋などつついた。
　二人のままごとのような恋愛は少しずつ深くなり、互いに必要とする関係になっていた。

八、四回生

　年が明けると、四回生になって入るゼミを決めなければならない。貴子は実家が水耕栽培でトマトやきゅうりを育てているので、園芸部の中田ゼミに入って、水耕栽培の可能性もふくめた未来の農業の形を研究して実家の農業に生かしたいというはっきりとした目標を持っていた。一方、純平のほうは、漫画に没頭したい気持ちが強いので、正直言って、ゼミはどこでもよかった。卒論さえ書ければいいいいというふうに考えていたのだ。貴子に相談したが、漫画を描いて生計を立てていくという純平の希望は実際には無理なんじゃないかと言った。趣味というか楽しみで描くのは理解できるが、仕事にするのは理解できないようだった。貴子はある意味、現実的な考え方の人間なのだ。それでも、漫画を描くには人間を知らないといけない、つまり、人間の行動の原因となるものを分析するような研究をしているゼミを選んだらどうかとアドバイスをしてくれた。
「人間の行動を研究しているゼミは二つね。坂東ゼミか伊達ゼミ。二人の先生の講義、受けたことあるの？」
「ああ、二人とも、講義と演習一つずつ取ったけど、先生のキャラが正反対なんだ。坂東先生はきっちりしていて真面目で、評価についても初めの講義のとき、テスト四

十パーセント、提出物三十パーセント、プレゼンテーション三十パーセントと明確に出したから、次の週、受講生が半分くらい減っちゃったな。厳しいけど信頼できる感じだった。伊達先生はフレンドリーで冗談も交えながら、おもしろい講義をしたけど、なんかいい加減な雰囲気だったな。でも、学生の間ではだんとつで伊達先生に人気があったけどね」

「ゼミの先輩に話を聞いてみた？」

「うん。やっぱり坂東先生のゼミはきついみたいだ。みんなプレゼンテーションの準備で青息吐息って感じ。僕漫画描きたいし、懸賞にも応募したいしさ、軟弱かもしれないけど、伊達ゼミにするよ」

「後悔しない？　一年かかわることなのよ。楽だからって選ぶのはどうなのかな？」

「就活もあるんだよ。貴子は実家を継ぐっていう具体的な進路が決まってるからいいけど…」

「わたし、実家の農業を継ぐに、もっと実践的な研究したいから、できたら、院に進みたいんだよね。父もそう言うし、勉強しないといけないわ」

「そうなのか。貴子は勉強家だね」

「そうでもないけど、大学に入ったからには何かつかんで、卒業したいと思う。純平はその辺、ちょっと甘いんじゃない？　せっかく入ったのに、専門の勉強に力入れてないよね。直接役に立たなくても、間接的に何か役に立つことあるよ。なんでも一生懸命やればね。一生懸命ってところが重要なんだよ。いい加減にやってても、何もつかめないから。本気で何かに取り組めば、きっと将来役に立つっていうか、自分のキャパシティーを広げることになるよ。それに、真面目に進路考えないと大変なことになるでしょ？　フリーターとか中途半端はどうかと思うよ」

「うん、そうだね」

純平はそう言ったものの、就活やゼミの研究から逃げ出したい気すらしていた。結局、伊達ゼミを選んだのだが、それが間違いだったことにすぐ気付いた。純平自身が真面目で融通の利かない性格だったからだ。伊達先生はゼミ生に自分の論文を書くためのデータを作らせていた。癖などの人々のなにげない仕草が、どのような状況で、どれくらいの頻度で起こるか等について、データを取って解析するのだが、解析には統計学の知識が要求されたし、コンピュータの操作においても、高度な能力が必要とされた。純平は人並みにコンピュータは使えるし、高校程度の統計なら分かるが、論文を書くレベルには程遠かった。伊達先生は学生に課題だけ与えると、後は放任主義で、自分で何とかしろというスタンスを取ったので、純平は途方に暮れてしまった。コンピュータや統計の勉強をしながらのデータ集めになったので、他のことは何もできない状態になってしまった。先生は期日を切って、何日までにある部分まで研究を進めておけと言ったが、純平は何も形にできないまま、進捗報告の場にいた。そこで、先生にきつい言葉を投げつけられた。

「おいおい、今まで何をしていたんだ？　そもそも、どうして僕のゼミに入った？　先輩に楽なゼミだとでも言われたのか？　よくできる学生にとっては、自分のペースでどんどん進められる自由で楽なゼミだけど、そうじゃない学生にとっては、きついゼミだと思うよ。自分で動いて分からなければ言って来い。受け身じゃ何もできないぞ。

僕は就活とかにもかかわりあいたくないから、その辺も自分で動いてくれよ。僕に頼ってくれるな！」
就活まで頼るつもりはなかったが、坂東ゼミでは教授がゼミ生を何とかどこんの企業に就職させるべくがんばってくれているらしい。少々過保護かなとも思うが、やはり羨ましい気がして、純平は自分の安易な選択を恨んだが、もう後の祭り。どうにかして卒論を書き上げなければ、卒業できない。描きかけのストーリー漫画は放り出したものの、卒論のほうも思うように進まなかった。純平の足はキャンパスから遠のいて部屋にこもることが多くなった。

九、貴子の死

そんな時突然貴子が自殺した。感電死だったそうだ。あまりに唐突で純平は訳が分からなかった。貴子が、あの強くて優しい貴子が、夢も希望もあって、自分の将来もきっちり考えていた貴子が、どうして自殺なんて…。ショックで、何もする気になれなかった。そういえば、貴子の最後のメイル、ちょっと変だった。
「女の人ってどうして自分の子ども、欲しがるんだろ？」
独り言のようなメイルに純平はあまり深く考えもせずに返信した。
「好きな人のＤＮＡを残したいのかな？　自分の生きた証を残したいのかもしれない」
「そう…」
納得していないような感じだった。貴子は何か問題を抱えていたのだろう。どうして僕に相談してくれなかったのだろう？　どうして僕は気付けなかったのだろう。後悔の気持ちが次から次に疑問を自分に突き付けた
純平は貴子の実家のお通夜に出かけた。マンドリン部の連中はお葬式に出るらしいので、その日は純平一人だった。焼香の順番が来た。写真の貴子はくったくない笑顔で、今にも「純平、しっかりしろ！」って声が聞こえてきそうだった。一度演奏会で挨拶をしたことのあるお母さんは泣きはらした目で純平に頭を下げた。いかついお父さんも肩を震わせていた。隣にはお姉さん夫婦が並んでいた。貴子によく似たお姉さんは目を伏せたまま、むせび泣いていた。帰り際、純平はどうしても貴子が自殺するとは思えなかったので、お母さんに尋ねた。
「どうして貴子は死ななければならなかったのですか。僕にはどうしても納得できません。大学院に進んで、もっと知識を学んで、実家の農業を手伝っていきたいって話していたのに…」
「それは…、わたしの責任なんです。許してちょうだいね。純平君のことは貴子からよく聞いていて、いいお付き合いをしてるって喜んでいたのに」
お母さんは涙をぬぐいながらも、純平には話すべきだと思ったのか、しっかり純平の目を見て言った。
「お話ししますので、弔問のお客さんが帰ってしまうまで少し待っていてくれませんか」
すがるような真剣なまなざしに純平は答えた。

「いつまでも待っています」
　お通夜に来てくれた人がみんな帰って、後は一緒に夜を過ごす身内だけになったころ、貴子のお母さんが純平のところに来て、皆のいないロビーの椅子に二人で腰を掛けた。お母さんが重い口を開いた。
「あの子の姉の道子、ご存知ですね、その道子が若いのに卵巣癌になってしまったのが始まりです。転移すれば命取りになるからと、全摘手術を受けました。手術はうまくいって、病巣を取ることはできましたが、子どもを産めない体になってしまいました。まだ二十六歳でした。結婚していましたが、まだ子どもはいなかったんです。道子の悲しみ、絶望は深く、どうにかなってしまいそうでした。道子は夫の光さんのことをとても愛していて、彼の子どもが欲しかったのです。何とか光さんの遺伝子を持った子どもが欲しいと思ったようです。考えに考えたあげく、貴子に卵子を提供してほしいと言ったんです。貴子の卵子なら、自分のＤＮＡと共通する部分があるだろうし、第一、信頼できますから。人工授精をして、できた受精卵を道子の子宮で育てて産もうと思ったようです。私もその方法が一番いいように思いましたから、道子と二人で貴子に頼む形になりました。貴子の前で二人で頭を下げました。でも、貴子ははっきりと『嫌だ』と言いました。姉の気持ちは貴子にもよくわかっていたと思います。よくよく悩んでの申し出だということしも痛いほど感じたでしょう。二人はとても仲のいい姉妹でしたから。だから即拒絶したのには正直驚きました」
「かわいそうに。貴子は拒絶したものの、悩んでいたのですね。それで、僕にあんなメイルを…」
「えっ？」
「女の人はどうして自分の子どもを欲しがるんだろうって」
「そうですか。貴子は『子どもが欲しかったら、親に捨てられたり、親に死なれたりした子どもたちがいっぱい里親を待ってるのに、どうしてそっちの方法を考えないのか』と道子に詰め寄りました。道子も『あんたに人を愛する気持ちなんか分からないわよ。わたしは光さんの子どもが欲しいのよ。もしかしたら癌が再発して、わたし長く生きられないかもしれないから、よけい早く子どもを産んで育てたいのよ』と食って掛かったんです。貴子も『そんなの愛じゃないわ。エゴよ。無責任でしょ。自分が死ぬかわからないのに、子どもを産むなんて。誰が育てるのよ』と言いまして…」
「貴子は間違ってないと思います」
「そうですね。『わたしの卵を光さんの精子とくっつけて、お姉ちゃんの子宮に入れて育てて産むなんて、なんかおかしい。それってわたしの子どもでしょ？　考えるだけで頭が変になっちゃうよ』って叫んでいました」
「そうですか。よく考えると、お姉さんとご主人の関係も貴子を挟んで妙なことになりかねませんからね」
　その時、近くで話を聞いていたらしい道子が来て言った。
「それだけじゃないんです。わたし、どうかしていました。貴子の気持ちを少しも理解しようとしなかった。どうして、こんな簡単なことに協力してくれないのかって腹が立って、貴子のことを責めました。『お姉ちゃん、そんなに光さんの子どもがほしいの？　他の人の子じゃだめなの？』ってまた言うから、わたし、貴子のこと、意地悪

だってなじりました。もう妹だなんて思わないって」
「貴子は意地悪な子じゃないですよ。倫理的に生理的に彼女には許せない部分があったんじゃないですか」
「今なら分かります。あの時、わたし、半分狂ってたのかもしれません。光さんに、光さんに言ったんです。『わたしのこと愛してるんなら、貴子を、貴子を…』」
「貴子を抱けって言ったんですか？　信じられない！」
「光さんもそう言いました。そして、わたしに『おまえは貴子ちゃんのお姉さんだろ？』って…。そのやりとりを貴子が聞いてしまったんです。貴子は悲しそうな目でわたしを見つめて出て行ってしまいました。貴子を殺したのはわたしです。わたし、貴子を追いつめてしまったんです。自分のことしか考えていなかった。貴子の後を追ったんだけど、見つけられなくて、謝れなかった。謝っても、許してもらえないような取り返しのつかないことを言ってしまいました」
　あとは涙で続けられなかった。
　純平は貴子の心中を思いやった。卵巣失った姉への同情はあったと思うが、自分の姉の夫との子どもができることには同意しかねたのだろう。貴子は間違っていない。全然間違っていないのに、母親と姉からのプレッシャーで潰れてしまったのかもしれない。かわいそうな貴子。純平は自分がもっと気を付けていれば、貴子は自分を殺さずに済んだのかもしれないと悔やんだ。あのメイルを見て、何か変だと感じたときに行動を起こすべきだったのだ。あのメイルが貴子からのＳＯＳだったのに、軽く流してしまった。純平は後悔の涙が後から後から出てきた。貴子の未来を守ってやれなかった自分が腹立たしかった。挨拶もそこそこに、貴子の実家を飛び出し、電車に乗った。どこか遠くに行きたかった。
　初恋の人の自死は想像以上のダメージを純平にもたらした。大切な光が一瞬で消えてしまったようで、もがいても、もがいても沈んでいく自分を止める術が見つからなかった。卒論も就活もすべてがどうでもいいことのように見えてしまった。純平の事情を知っているゼミの仲間は、恋人を失った純平を腫れ物に触るように扱った。気を使ってくれているのが分かるだけに、ゼミの研究室にいるのも辛くなった。しかし、なんとか卒業しなければと、アンケートやビデオを撮って、研究に必要なデータを集めた。苦労して集めたデータの数字が並んだ表を前にしても、就活のエントリーシートを前にしても、やる気が全然起こらず、パソコンの画面を広げたまま、ベッドに横になると、いつまでも寝ていた。食べることも忘れてひたすら眠っていた。

　電話しても、メイルを送っても、全然反応のない純平のことを心配して、真守がやってきたときも、純平は玄関のかぎを開けっぱなしにして、ベッドの中で丸まって眠っていた。
「純平、起きろよ！　顔洗って、歯、磨いて、何か食いに行こう！」
　布団をはぎ取って、真守はびっくりした。頬のこけた生気のない純平がいたからだ。
「あっ！　真守、どうした？」
「どうしたじゃないだろう？　お前のほうこそ、どうしたんだ？　ちっとも返信よこさないから、心配したじゃないか」

「貴子が…、自殺してしまった」
「えっ？　貴子ちゃんが？　どうして？　しっかりした明るい子じゃなかったのか」
「事情は貴子の身内にも関係することだから言えないけど、貴子が死んでしまいたくなる気持ち、分からないでもないよ。僕だって、貴子の立場だったら、同じことしてたかもしれないよ」
「うーん、よく分からないけど、自殺はないんじゃないか？　後に残されたものはたまらないよ。一生重い十字架背負うことになる。特に身内が原因だとしたら、なおさらだよ」
「そこまで思いやる余裕があったら、自殺なんてしないんじゃないか？」
「うん。そういやそうだな。それで、お前が凹んで、布団の中に入って、何もせず、何も食わず、死んでしまうってのもおかしいだろ？　早く起きて、何か食いに行こう」
「何も食いたくないけどな」
「バーカ、人間ってのは何があっても、腹は減るもんなんだよ」
　真守は引きずるように、純平を近くのうどん屋に連れて行った。お腹に優しい食べ物がいいと思ったのだ。ツルツルとうどんを食べながら、真守が言った。
「食えるじゃないか。食ったら帰って飲もうぜ。おまえ要領悪いから、いろんなこと、うまくいってないんじゃないのか？　話、聞くよ」
「ありがとう」
　純平は少し笑顔を見せた。帰りにコンビニで安いワインと安いチーズとクラッカーを買って、純平の部屋に戻った。
「貴子のことは衝撃だった。お互いに何でも言えて分かり合ってると思ってたし、ずっとこのまま一緒にいたいと思える存在だったから。そんな深い悩みがあったなら、僕にも一緒にその悩みについて考えさせてほしかった。悩みって話すと少し軽くなるだろ？　僕って貴子にとって一体どんな存在だったんだろう？　貴子に信頼されてなかったのかな、　貴子のこと全然見えてなかったのかなってさ、情けないよ、自分が」
「相手のことすべてわかろうなんて、無理だよ。今まで全く違う人生を生きてきたんだよ。知りえるのは今の姿だけ、生い立ちとか親との関係とかあまり話さないしな」
「そうだね。今の貴子しか知らないし、貴子の心、全部見えるわけじゃないよね」
「やっぱり嫌なことって話したくないよ。特に好きな人には」
「そうかもしれないね」
「そうさ。貴子ちゃんの死は少なくともおまえのせいじゃない」
「分かってるけど、もっと何かできたんじゃないかと自分自身に苛立つんだ」
「誰も何もできないよ。貴子ちゃんはもう限界だったんだろうから」
「うん、多分そうなんだ。ここから消えてしまいたいって思ったんだ」
「…それはそうと、そんな状態で卒論は進んでるの？」
「貴子が死ぬ前から、卒論、進まないので参ってたんだ。教授ともうまくいってない。手とり足とりしてほしいって言ってるんじゃないんだけど、放ったらかしなんだ。データを取るにしても、取る状況設定とか間違ってしまったら、データ全体の意味が無くなるでしょ？　そこを見てほしいのに、面倒くさいのか目を通してくれないんだよ。理系じゃないのに統計学なんてやりたくないしさ」

「教授ってさ、『学生を教える』ことも仕事なのに、それを自覚していない人、多いと思うよ。自分の研究だけに興味があって、『教える』ことなんて頭にないっていうかさ。それで給料もらってるのにね。いろんな教授いるよ。一口でいうと、馬が合わなかった悲劇かな」
「楽を選んだのは自分だから自業自得なんだけどね。貴子だってこんな僕をじれったく思ってたんじゃないかな」
「そういや漫画は描いてるの？」
「時間がないんだ。本当にやりたいことがやれてないフラストレーション、大きいな」
「優先順位しっかり考えろよ。貴子ちゃんの死はおまえにはどうしようもなかったなだし、今いくら後悔したって悩んだって彼女は帰ってこない。少しずつ少しずつ思い出になっていくんだと思うよ。『時、薬』っていうだろ？　漫画も頭から追い出しておく。まず卒業だろ？」
「そこなんだけどさ。卒業して就職浪人するより、大学で一年留年してしっかり就活するほうがいいっていう話もある」
「おまえ、企業への就職考えてるのか？　俺はおまえは漫画のプロを目指すと思ってた」
「そこんところも悩みの種なんだよね。大学出たら、親に頼れないだろう？　アパート代とか生活費のこと考えると、就職して、時間見つけて漫画描くしかないと思う」
「おまえにそんなことできるのか？　企業に就職して、仕事をしていくって大変だぞ」
「分からないけど…」
　真守は純平がかなり参っているものの、恋人の死についても語れるし、少しずつ整理もついているように感じた。問題は卒業と就職だと思うが、その問題は大学四回生みんな共通の問題で、一人一人が自分で切り開いていくしかない類のものだ。純平も自分の選択に対して、責任をもって対処していくべきだろう。真守は純平が普通に思考できてるし、食べられないわけでもないから、大丈夫だと判断して、二泊して帰って行った。
　純平は真守が来てくれて、少し元気になれた。真守自身も悩みもあるだろうに、純平の話を聞いてくれた。幼馴染ってありがたいと実感した。が、真守の言う通り、卒論しあげて、就職して、その片手間に漫画を描くなんて、実際不可能な気がしていた。
　その卒論も就活も進まず、ウツウツした日々を過ごしていたある日、キャンパスで貴子を見たと思った。でも、貴子によく似た別人だった。彼女も貴子と同じようにエネルギーにあふれ、キラキラしていた。その隣にはボーイフレンドらしき男の子がいた。がっしりとした体つきで、何かスポーツをやっているようだ。純平は不思議なものを見るように二人を凝視した。二人は一瞬たじろいで、互いに目配せをすると、純平から遠ざかるように去って行った。貴子がもういないと分かっているのに、キャンパスに来ると、無意識に探してしまう自分がいた。純平は回れ右をして、自分のアパートに戻り、布団をかぶって震えていたが、いつのまにか眠ってしまった。

十、自殺未遂

どれくらい眠っていたのだろう。突然ムクッと起き上がると、家を出た。外は薄暗くて寒かった。足は自然といつも行く公園に向かった。緑の多い、広い公園で、真ん中に池があって、日中はカモやアヒルが泳いだり、カメが日向ぼっこをしたりしているが、今は姿が見えない。池の周りにはあちらこちらにベンチが置かれて、木立が迫っているので、夏場は涼みにやってくるお年寄りの憩いの場になっている。今は六月の上旬。日中はあたたかいが、朝晩はまだ冷たい。夜も明けていない薄暗い公園を散歩する人もいない。純平は上着も羽織らずに出てきたので、体が冷えてきた。ジーンズのポケットに手を突っ込んで、歩き続ける。どこへ行くのか、何をするのか、自分にも何も分からないままに、足だけどんどん前に進む。池のそばのベンチに腰を下ろして池を見る。カモが二羽、ゆったりと仲良く泳いでいる。対岸に行こうとしているようで、静かに波紋を描きながら進んでいく。一緒に歩んで行こうとしていたパートナーを失った痛みが突然胸を突き刺した。純平は立ち上がり、丈夫そうな枝を探す。見つけるど、やおらズボンのベルトを抜いて、枝にかけた。太い枝にベルトが丸くひっかかって揺れている。その輪の中に首をまさに入れようとしたとき、だれかに抱きかかえられた。

「何をするんじゃ。目を覚まさんか！　若いのに…」

おじいさんはそれだけ言うと、しばらく純平をしっかり抱いていてくれた。

「ウッ、ウッ…」

純平の口から嗚咽が漏れた。純平は泣いた。涙が頬を伝い、おじいさんの服を濡らした。純平は静かに泣き続けた。泣き止む頃には、朝日も顔を出し、あたりは明るくなり始めた。おじいさんは純平の肩を軽くポンポンと叩くと、純平の目を見て言った。

「帰る場所はあるのか？」

「はい。ありがとうございました。もう少しここで池を見てから、帰ります。大丈夫です」

おじいさんは「うん、うん」とうなずくと、散歩に戻り、池の回りを歩き始めた。純平は暗く沈んでいた池が朝日を浴びて、キラキラ輝いていく様子をじっと見ていた。ゆっくりと水面が明るくなり、生気を取り戻し、朝のウォーキングのお年寄りがボチボチ日課のお散歩に訪れる。純平は立ち上がり、ベルトを締めて歩き出す。悩みが解決したわけではないが、一つ憑き物が落ちたような軽さを感じた。アパートへ帰ると窓を開け、朝の空気を吸い込んだ。

そして、久しぶりに姉の昌子にメイルした。

「相談したいことがあるので、会いたい。大阪まで行くから、都合のいい日を知らせてほしい。親には内緒にしてほしい」

普段メイル等して来ない弟の異変を察した昌子は早速返信した。

「分かった。今週の土曜日、梅田の紀伊国屋の前で会おう。一時でいいかな？」

「ＯＫ、よろしく」

二人は正月以来会っていなかったので、昌子は純平の憔悴ぶりに、ただならぬ気配を感じ、駅中の落ち着けそうな喫茶店に入って、改めて純平をまじまじと見た。

「マンドリンの演奏会、すごく良かったって、お母さん言ってたよ」

「うん。でも、もうサークル活動は終わってしまったんだ」
「卒論書かなくちゃいけないもんね」
「大学…、やめたらダメかな？」
「ええっ？　どうしてよ？　あと少しで卒業でしょ？」
「卒論、書けそうにないんだ。就活もエントリーシート何枚か書いただけだし」
「卒業はしたほうがいいよ。せっかく入った志望校だし、今まで頑張ってきたんだし。学歴ってやっぱり社会に出たら、大切だよ。何をするにしても、大卒っていう学歴は邪魔にならないと思うよ。後で大卒の資格取りたいと思っても大変なんだから。卒論なんて適当でいいんだよ。あんまり真面目に考えるから進まないんだよ。わたしなんか卒論提出の前日に、男の先輩二人に家に来てもらって、データ整理手伝ってもらって、体裁だけ整えて出して通ったんだから。口頭試問はひどいもんだったけどね。大学だって早く卒業させないと面倒だから卒論、出せば大概通るんとちがう？　枚数とかの規定さえ押さえておいたらいけるよ。学部生の卒論なんて、だれも何も期待してないと思うけどね。留年しても卒業はしてほしいな」
「留年してもゼミは変えられないと思うから、同じ教授について同じテーマで卒論進めるしかないでしょ？　僕は担当教授と合わないんだ。留年しても同じじゃないかな」
「さあ、どうなるのかな？　やっぱり教授と相談して、これからのこと決める形にしたほうがいいよ。純平、あまり教授とコンタクト取ってこなかったでしょう？　やっぱり教授だって人間なんだから、何も言って来ない学生にはアドバイスだってできないよ。どこが分からないのか、具体的に示して、教授に指示を仰ぐっていう姿勢でいかないと、どの教授についても同じだよ。今の教授にはもう一年お世話になるかもしれないんだしさ。筋通さないといけないと思うよ」
「そういえば、僕、教授と個人的に話したことないよ。一度合わないって思ってしまったから、相談するのとか億劫になっちゃって。よくないね、そんな態度、後ろ向きすぎるね。それに、最近あんまり学校に行っていないんだ。一度心療内科に行ってみてもらったら、鬱病じゃないけど、鬱的状態だって言われて、薬も飲んだ。…首をつろうとしたこともあって」
「何？　自殺しようとしたの？」
「夢遊病者みたいにフラフラと公園まで行って、木の枝にベルトをかけたんだ。散歩中のおじいさんに止められて、我に返ったんだけど…」
「よかった！　おじいさんが来てくれて。そんなに卒論、負担になってるの？」
「貴子に死なれてしまってから、何もする気になれないんだ」
「えっ？　貴子ちゃん、どうして？　事故？」
「自殺しちゃったんだ。僕に何も言ってくれなかったけど、卵巣を失ったお姉さんに卵子を提供してほしいって言われて、悩んでたみたい」
「うーん、かわいそうに、貴子ちゃん、辛い状況だったんだね。純平にとって貴子ちゃんは大切な存在だったんだものね。初恋の人でしょ？　自分が壊れてしまうほど大切な人だったんだね」
「分からない。いろんなことが重なって、悪いほうに相乗効果になったのかもしれない。もう死にたいっていう衝動はないけどね」

「恋人を亡くすなんて、わたしには想像もつかない。純平は恋愛自体に免疫なかったもんね。ちょっと重すぎる現実に直面したんだね。まあ、いろいろあって、大人になるんだけど…。お父さんやお母さん、純平の自殺未遂、知らないでしょ？」
「知るわけないよ。お姉ちゃんも言わないでね。心配させるし、かっこ悪いだろ？」
「でも、もし大学にもう一年いるんだったら、留年したいってことは言っとかないとね。学費も出してもらうわけだし、純平からきちんと説明したほうがいいよ」
「そうだね。もう一年、親の脛かじることになるわけだものね。申し訳ないと思うけど」
「学費だしてもらわないとやっていけないでしょ？　バイトばっかりすることになって、勉強する時間がなくなったら、本末転倒でしょ？　もう一年甘えて、後は自分で何とかしないとダメだよ」
「分かった。留年しても卒業する方向で考えるよ。忙しいのに来てくれてありがとう」
「頼りにされることなんてなかったから、うれしかったよ。しんどいだろうけど、一つ一つ自分でクリアしていかないと、どうしようもないからね。それでも、もうダメだってギブアップのときは、連絡してね。早めに！　約束だよ」
「うん、約束するよ」
　昌子は純平には親に言ってくれるなと言われたが、自殺未遂の話は母の耳には入れておこうと思った。母は当然びっくりして、一刻も早く純平のもとに行こうとしたが、昌子は必死に止めた。母親が行って、解決するような問題じゃなくて、純平自身が一人で乗り越えていかないと仕方のないことだと母親を説得した。母はしばらく警察から「お宅の息子さんがアパートで自殺していました」といった類の電話がかかってこないかとビクビクしていたそうだ。でも、すぐに死ぬほど辛くて、死んだほうが楽なら、死ぬのも一つの方法かもしれない。自死というのは人間だけに与えられた特権なのだと考えを改め、腹をくくったらしい。親としてその考え方はどうなのかと疑問の残るところだが、結果的には親が介入しないでよかったと昌子は思った。

十一、留年

　年末から年始にかけて、千葉の純平も大阪に住む妙子も帰省し、家族五人で正月を迎えた。前島家には元旦に恒例の行事があった。お雑煮を食べる前に、カンをした日本酒をおちょこに注いでもらって、今年の目標を一言みんなに言ってから、一息に酒を飲みほすというものだ。なんだか面倒くさいのだが、父はこだわった。その父は「テニスも仕事もバリバリする」と宣言。母は「四月から社会人枠で入った大学院で言語の勉強、頑張る」とやる気を見せた。昌子は「役所の仕事は思ってたよりきつくて薄給だけど、戦力になるようがんばるわ」　純平の番が来た。
「一年留年させてください。卒論を仕上げることができませんでした。就活もしていません。すみません」
　母と昌子は事情を知っていたが、何も知らされていない父は激怒した。
「一年間何やってたんだ？　サークルも引退したんだろ？」
「取り立てて何もやってません」
「コミックマーケットとか、漫画にうつつを抜かしていたんじゃないのか？」

「漫画もやってません。アパートの一室でウツウツしていました」
「はあ？　鬱？　会社にも若いやつで鬱で休職中のがおるわ。診断書出して金もらって堂々と休んでる。みんなそれなりにストレスあるし、自分で解決できない問題抱えて生活してる。自分だけが不幸でございって暗い顔して鬱だって…。甘えるなって言いたい。たしかに本当に鬱病の人はいるよ。お父さんたちの仲人してくれた山中さんみたいに。責任感の強い、真面目でやり手の人だったのに、経営の芳しくない出向先の社長にされたがために鬱病になってしまって、回復期に自殺してしまった。でもな、若いやつ、大概鬱っぽいだけのやつが多い気がする。鬱病と鬱っぽいのとは大違いだよ。だれでも鬱っぽい気分のときはあるもんだ。大人になる前の青春時代なんて真っ暗でウツウツした時期だ。それを乗り越えてこそ大人と言えるんだ。純平、おまえは鬱病なのか？　それとも、鬱っぽいのか？」
「分かりません。多分鬱っぽいんだと思いますが、心療内科で薬を出してもらってのんでました」
「医者は薬を出すもんだ。それで儲けてるんだからな。後一年は仕方がないから学費は出す。しかし、それ以降は一切親からの援助はないと思ってくれ。おまえのためにいくら使ったと思ってるんだ。溝に捨てたようなものだ。おまえにはもう何の期待もしない。自分で生きる道を探せ！」
「お父さん、そこまで言ってはいけないでしょ。親でも言ってはいけない言葉はありますよ」
　たしなめる母を標的にして、父は続けた。
「だいたいおまえが文系に行って好きなことをしたほうがいいなんて、純平に吹き込んだから、純平の気持ちが変わったんだろ？　文学部なんか入ってこのざまだ」
「またそんなこと言ってわたしをなじるんですか。しつこいんだから。おまえの育て方が悪い。おまえが全部悪いって、都合の悪いことが起こったら、みんなわたしのせいにする。きちんと相談に乗ってやりもしないで、人を責めることしか知らないのね。子どもたちが父親を必要としているとき、単身赴任で父親の責任、果たさなかったのはそっちでしょ？」
「単身赴任は俺の望んだことじゃない。会社がそういえば、従うしかないんだ。病弱の妻や子どもがいようが、介護の必要な老いた親がいようが、そんな家庭の事情は考慮しちゃくれない。企業なんてそんなもんだ。嫌なら辞めてください。代わりはいくらでもいますよってな。辞めるわけにはいかないだろう？」
　二人の言い合いを聞いていた昌子が止めに入る。
「二人とも正月早々夫婦喧嘩はやめてよ。純平だって、一人で悩んでしんどかったと思うよ。貴子ちゃんの自殺も純平にとったら、大きな出来事なのよ。大切な人を亡くしてしまったら、、鬱になるのも当然でしょう？」
「貴子ちゃん、自殺したのか。知らなかった」
「少しは息子の心に寄り添って考えられないの？　育ててやってるとか、教育に大金を使ったとか恩着せがましく言って…。親が子どもを育てるのは当たり前のことでしょ？　だれも産んでくれって頼んでないよ。自分たちが子どもを作って産んだんでしょ？　人間の子は動物の子と違って、すぐに立つことさえできないのよ。親が手をかけないと命が長らえないようになってる。子育てを通して親も本当の親になっていく、一人前になっていく

って面もあると思う。子どもはある年齢になるまで自分の力では何もできない。お金を稼ぐこともできない。親の庇護のもとでしか、存在できない。だから、親に従うしかないの。親の言うことを聞くしかない。小さい頃はそれでいいけど、思春期になると、子どもにも自我が芽生えて、自分の人生について考えるようになるし、それが親の求めるものと違ってることもある。人生の先輩としての意見は聞くけど、子どもにだって譲れない部分があるとは思えないの？　自分が子どもだったころのこと、お父さん、忘れた？　そんなに親に従順だった？　子どもは親にいっぱいお金を使わせてる。トータルしたら、途方もない金額のお金を使わせてる。けど、わたしたち、そんなに親に遠慮しないといけないの？」

「親の負担とか苦労とか少しでも考えたことがあるのか？」

「どこの親も大なり小なり苦労して子ども育てているわ。でも、その恩を強要するような親、いる？　どうしろというのよ？　育ててくれてありがとう。ご飯食べさせてくれて感謝してます。学費出させてすみませんって毎回言わないといけないの？　感謝してない子どもなんていないわ。口に出すか出さないかでしょ。そんなこと口に出さなくても分かってくれてるって子どもは思ってるのよ。甘えかもしれないけど。甘えてもいいじゃない？親子でしょ？　それとも、感謝もあらわさない子どもにはお金は出せませんって言うの？強要される感謝ほどウザいものはないわ！」

見かねた母と妙子が二人を引き離す。

「親子でも口に出す言葉、気を付けないとダメよ。貴子ちゃんのこと、お父さんに言ってなかったから、お父さんに純平の状況が分かってなかったってところもあるのよ。それはお母さんに責任があるのよ。二人とももう口を閉じて！　お雑煮冷めてしまうでしょ。せっかく作ったおせちもまずくなってしまいますよ」

妙子も口をとがらせる。

「わたしのニューイヤーレゾリューションはどうなるのよ。まだ言ってないよ」

「言いなさい」と父。

「軽音のサークル活動とフランス語の検定がんばります」

「さあ、食べましょう」

妙な雰囲気の中、五人はそれぞれの思いを胸に、雑煮を黙々と食べた。正月三が日が終わると、みんな自分の場所に戻って行った。純平も父とわだかまりを残したまま、実家を離れた。ただ早く親から経済的に自立しないといけないということは嫌というほど実感させられた。

冬休みが明けると、さっそくゼミ教授の伊達先生に留年してもう一年かけて、卒論をしあげたい旨を伝えた。先生は少し考えていたが、口を開いた。

「そうか。何か悩んでるのには気づいていたが、君のほうから何かアクションがあるまではと待っていた。卒論のテーマをもっと絞ってみるか？　自分でどの部分に興味が持てるか、どこを深めたらおもしろいか、考えてきなさい。きちんと卒論を完成させて、来年は卒業してほしい。就職はどうするつもりなんだ？」

「早めに動いて、まず三社にエントリーシートを送付するつもりです。逃げていても何も解決できませんから」

「文系の場合は企業の部署でいうと、総務とか営業、社種でいうと、銀行とか証券会社と

か保険会社になるだろうね。どこを受けるとか、その結果とか報告してほしい。コネはないけど、相談には乗れると思う。大学のほうでも就職カウンセリングみたいなサービスは行ってるはずだから、利用しなさい」

教授にしても自分のゼミから留年性や就職浪人を出すのは不本意でもあるのだろう。初めて親身になって向き合ってくれたように感じた。姉の言ってたように自分から行動を起こせば、教授も向き合ってくれるのだ。純平は感謝の気持ちを込めて言った。

「ありがとうございます。また一年よろしくお願いします」

その足で教務課で留年の手続きをして、学生課で就職相談を受けて帰った。

まず部屋を片付けて、掃除機をかけ、洗濯機を回した。汚れていたトイレもブラシでこすってピカピカにした。部屋が南向きでないので、布団は干せても太陽に当てることはできないが、少しでも新鮮な空気に触れさせたいし、ベッドも乾かせたいので、ベランダの柵にひっかけた。敷布団やベッドのマットレスに小さいカビの黒い点々がついていた。部屋中にカビの胞子が飛んでいるようで、気味が悪くなって、窓も開け放した。北風がビュンビュン入ってきて寒かったが、気分は爽快だった。父にはっきり言われたことで、一年先には自活するのだと自分自身、ふんぎりがついた。

純平は伊達先生とじっくり話し合い、卒論のテーマを人間同士の会話の中でよく用いられる終助詞、接続助詞の中から一つ選び、その語が発せられるときの感情や状況との関連を調べることにした。まず仮説を立てて、それを証明するべく、いろんな状況下での自然な会話を集めて、仮説が正しいかどうか検証し、結論付けることにした。純平の不得意な統計も最小限に絞り、アナログ的な解析を主流にすることにした。ただ、データを取るときのシチュエイションは、その語の研究を左右するので、それができた時点で、また持ってきて二人で検討することになった。

伊達先生はこちらが具体的にすることを提案すれば、明確な指示を与えてくれた。見かけや噂だけで、先生を評価してしまっていた自分の態度を純平は恥じた。地味な研究であるが、会話をビデオに撮っていると、人の心理や感情が言葉以上に表情や仕種に羅われるのがおもしろく、ノンバーバルコミュニケーションの研究に指針を変えることにした。言葉より、表情のほうが雄弁なケースがたくさん出てきたのだ。少しずつ進む方向が見えてきたのがうれしかった。夏休みの終わるころにはビデオを集め終わり、それからは、その解析に没頭した。

就活に関しては父が電機メーカーに勤めている影響か電機メーカー三社に履歴書を送った。最初には反応のあったT電機の関連会社に面接試験に行ったところ、あっさり採用の内定をもらえた。年末には卒論もほぼ完成したので、正月はゆっくりできた。去年のあの真っ暗な日々は一体何だったのだろうと思った。いまでも貴子は純平の心の中にいて、くじけそうになったとき、叱咤激励してくれていた。そんな時貴子はいつも笑顔だった。そういえば、純平は貴子の悲しそうな顔を見たことがなかった。純平の中の笑顔の貴子は思い出の箱の中で大切な人として存在していた。彼女を失ったことで自分自身も否定してしまう罪悪感や無力感から解放されたようだった。これまでの物事に対する自身の取り組み方を反省し、ゼミや就活を通して、自ら行動を起こし、「する」ことが大切なんだと実感していた。「悩む」ばかりでは何も生まれない。

十二、就職

三月には一つ下の後輩たちと一緒に卒業し、下旬にはT社の研修に参加した。自社製品の特色や新発売の機種の機能などの説明を受けた後、家電の大手販売店のチェーン店であるY電機、J電機、K電機等の店舗に派遣され、来店するお客さんに自社製品を中心に売り込むという現場実習が行われた。新入社員がみんな通る道だとかで純平の行かされたK電機にも、P社、S社などからも新入社員が派遣されていた。その実習は地元の店舗で行われたので、純平もその期間は実家に帰ることになった。母は信じられないという顔をした。

「純平に営業なんて出きるの？　お客さんと話すんでしょう？」

父は母を安心させようと言った。

「朴訥で正直な営業マンが案外売り上げを伸ばすものだよ」

弁当を作りたがる母を「昼は他の会社から来てるやつらと外で食べるよ。それも勉強だよ」と説き伏せ、毎日自転車で三十分ほどの店に通った。自社の製品についてさえ付け焼刃の知識しか持っていなかったので、幾つもの会社の製品カタログを手に冷蔵庫を見に来た夫婦に自社の冷蔵庫が他社よりどこが抜きんでているかアピールできず、CMで流れている程度の謳い文句しか出てこなかったせいで、他のメーカーの営業マンに持っていかれてしまったり、まったく買う気のない客に長々と説明してしまったりして、なかなか思うように製品を売ることができなかった。他社メーカーの新入社員と昼ご飯を食べたとき言われた。

「自分とこの製品をよく知って愛着を持ってお客さんに接しないと売れないよ」

「勉強不足だな、やっぱり」

「お客さん、家電のことよく調べてるからね。何社もの製品、比べてるよ。自分とこの製品くらいはせめて把握しとかないとダメだよ。ここでは自社製品の売り込みというより、K電機がもうかるようなセールストークをしないといけないんだけどね」

「その通りだね。もっと勉強するよ」

辛いような楽しいような二週間はあっという間に経ち、純平はまた千葉に帰った。両親は心配しながらも、社会人になった息子をまぶしいように感じていた。

本社に戻ると、純平は経理に配属され、ビル内の仕事になった。経済学部や経営学部出身ではないので、経理のノウハウは丸っきりわからなかった。計算などほとんどコンピュータ任せになっているのだが、どうしても分からないことも多かった。そんなとき、一つ上の先輩に尋ねても、「自分で考えろ！　学生じゃないんだぞ！」の一言で取り付く島がなかった。一言助言してくれれば、二時間程度でやりとげられるような仕事を一日がかりでやるような日々が続いたせいか、仕事ができない新人というありがたくないレッテルを三か月後にはもらっていた。ボーナスも少し出たが、「おまえ、もらえるのか？」と正面切って言う人もいた。社会人になっら、仕事は自分で覚えるものだと思うが、やる気のある新人を育ててやろうという社風が感じられなくて、毎日が辛かった。大学のマンドリン部の先輩にメイルで自分の現状を報告すると、自動車メーカーの営業を二年やっている先輩も毎月何台売ったかが評価されて、かなり参っているようで、やめようと考えているところだった。

「こんなことずっとやってたら、死んじゃうよ。車なんてそんなに売れるものじゃないよ」
数字を出さないと評価されない職場はやはりきついのだろう。
ＩＴ関連会社に就職している真守も残業残業のハードワークで、休日も呼び出されることが多く、休みが取れないので、消耗しているようだった。
「ぐっすり眠りたいよ。それだけ」
会社で働いてお金を稼ぐって大変なことだとつくづく思い知らされた。そんな現実を知ると、Ｍ電機で三十年も働いている父の偉大さを改めて実感した。甘くないのだ。会社では本音で話せる友人も見つからないが、そんなものだと割り切って、ノルマを果たすことに専念した。
漫画のほうはやはり仕事が忙しくて、落ち着いてストーリー物を描く余裕はなかったが、サイトへの絵の投稿は続けていた。純平の描く絵のファンもかなり増えてきて、ホームページへのアクセス数も多くなってきたのが、日々を支えてくれる楽しみとなっていた。
入社して半年が過ぎ、仕事にも慣れてきたとき、純平は仕事上で重大なミスを犯してしまった。新製品の発注のことで、例の先輩に確認しても取り合ってもらえなかったので、自分で判断して出した数字がとんでもない値だったようで、会社の信用を失墜させかねないミスとなった。普段会社では社長に会うことはめったにないものだが、その社長から名指しで呼び出された。最上階に上るエレベーターの中で緊張のため心臓が飛び出さんばかりだった。謝るしかないのだ。しっかり謝ろうと心に決めて、ドアをノックした。
「入れ！」
冷徹な声がした。
「失礼します！」
部屋に入ると、社長は窓から外を眺めながら言った。
「自分が一体何をしたのか分かっているのか？」
「はい。会社に甚だしい損害を与え、取引先の信用も無くしかねない窮地に追い込んでしまいました」
「分からなかったら、どうして他の社員に尋ねないのだ。聞くは一時の恥、聞かぬは一生の恥というではないか」
「はい、申し訳ありませんでした。任された仕事は自分で判断するのが自分の責任だと思っていました」
「これからは、分からないこと、判断に迷ったことは、上司にしっかり尋ねなさい。今回の件に関しては、君の出した報告書をきちんとチェックしなかったものの責任のほうが重大だがな。二度とこんな失態のないよう以後気を付けたまえ」
「はっ、誠に申し訳ありませんでした。以後気を付けます。失礼しました！」
玉のような脂汗をにじませ、部屋を出て、自分の持ち場に戻った。ほどなく直属の上司も呼び出され、叱責を受けたようで、席に戻ると、苦虫をかみつぶしたような顔を純平に向けた。
「君はこの仕事に向いてないんじないの？　無理しなくてもいいんだよ」
遠まわしに退職を促された。例の先輩は薄ら笑いを浮かべ、他の社員は気の毒そうな目を純平にちらっと向けたが、すぐに前のパソコンに目を移した。純平はここで辞めたら、負け犬になってしまうと歯を食いしばって言った。

「すみませんでした。これからは何でも上司に相談するよう社長に言われましたので、よろしくお願いします」と頭を下げた。
上司や先輩の冷たい視線にさらされながらも、純平は頑張ったが、パソコンにあふれる数字、数字、数字。各々が意味を持つはずの数字だが、純平の目には悪意を秘めて自分に迫る虫の行列に見えた。

十三、退職

その一か月後、純平の人生を分ける大きなできごとがあった。ｐｉｘｉｖに投稿した純平の絵に注目していた小さな出版社「ビッグヒット」の編集者がコンタクトを取ってきたのだ。「うちの月刊誌に漫画を描いてみませんか」というもので、純平にとっては願ってもない誘いだった。ｐｉｘｉｖは最近では有望な新人発掘の場になっているらしい。とてもうれしい申し出なのだが、読み切りではなく連載となると、今の仕事と両立させる自信はなかった。どちらも片手間にするほど甘い仕事ではないと思った。実家に電話をかけて、相談した。母は驚きを隠せない様子だった。
「えっ！　連載の仕事？　月刊誌？　すごいね。やったねって感じだね。認められたんだね。よかった。うーん、でも、いいとこに就職できたのにね。月刊誌だったら、月一回だから、なんとか仕事、続けられない？　生活していかないとダメだしね。一本で食べていけるの？」
「原稿料って一ページ数千円らしいから、三十枚描くとしてギリギリかな」
「不安だね。会社勤め続けたら、会社ネタも漫画になるんと違うの？　『島耕作』とかあるし。二足のわらじは無理かな？」
「今でも仕事でいっぱいいっぱいって感じなんだ。この前僕のせいで会社に迷惑かけちゃったし。会社の仕事続けながら連載なんて考えられないよ」
「純平は要領悪いから、一度に二つのことはきついかもしれないね。どっちも潰れちゃうかも…。純平の人生だよね。漫画家になるのが夢だったんだものね。うーん、覚悟決める？人生の分かれ道だね。会社やめて、やってみるか？」
父のほうは本音は不安定な漫画家より今の仕事を続けてほしいと思っているようだったが、こちらも純平の夢の実現を阻むことはできないと考えて、決断は純平にゆだねた。二人は「冬のボーナス、もらってからやめなさいよ。でも、やめることは早めに会社に言わないといけないよ」と付け加えるのを忘れなかった。何かせこいなとは思ったが、少しでもお金は欲しいので、十一月のはじめに、直属の上司に年内いっぱいで会社をやめたいと伝えた。漫画の連載の仕事が急に入ったことが理由だと言うと
「この仕事は君にはやっぱり向いてなかったのかもしれないね。これからは、自分が本当にしたいことを仕事にできるんだから、しっかりやりなさい」と励ましてくれた。それからは周囲の人の純平を見る目が変わった気がした。できの悪い使えない新人から絵を描く才能のある漫画家の卵に昇格したのだ。辞める日には例の先輩まで「雑誌が出たら買うからな。頑張れ！」と言って送り出してくれた。

十四、漫画家になる

会社を辞めるとすぐ六月新連載を目指して「ビッグヒット」の担当編集者である木島さんとの打ち合わせに入った。
「連載してもらう雑誌『プライド』は中、高生をターゲットにした雑誌で、先生にはかっこいいバトル物を描いてもらいたいんです」
純平自身は昔読んだ「ふろん」のような思春期の不安定な揺れ動く心を高校生を主人公にして描きたいと思っていたが、そんな希望は売れっ子になってはじめて言えるものだと分かった。不本意ではあるが、戦闘をメインにした物語を作るということで、キャラクターとネームを考えるよう指示された。ペンネームは投稿していた時から使っている「ヤマトタケル」に決めた。その木島さんから提案があった。彼がもう一人持っている漫画家に佐々木剛という先生がいるから、今度顔合わせをして、しばらく先生のところにアシスタントとして入っていろいろなことを教えてもらわないかということだった。純平はありがたくその提案を受けることにした。
紹介されたプロの漫画家の佐々木先生は少々ぽっちゃり型でぼさぼさの頭に眼鏡をかけて、みるからにオタク臭を放っていた。木島は佐々木先生に純平を紹介した。
「佐々木先生にはもう二年ほどうちの雑誌で連載してもらっています。ネーム作りには担当の僕もアイデアを出させてもらっています。こちらのヤマト先生には六月から『プライド』で新連載してもらうことになりました。なにぶんはじめての連載なので、しばらく佐々木先生のところでアシスタントとして使ってもらいたいと思います。ヤマト先生にとってはかなりきついスケジュールになると思いますが、分からないことがあれば、何でも佐々木先生に聞いてください。先生は頼りになる方ですよ」
「よろしくお願いします」
「僕もそれほど経験があるわけではないですから、偉そうなことは言えないですが…」
「連載を控えて分からないことがいっぱい出てくると思うよ。それで、僕としたら、ヤマト先生はしばらく佐々木先生のところに居候させてもらったらどうかと思うんです。ペン入れとか漫画に関することのほかに、具体的な仕事の回し方とかアシスタントさんの使い方とか、一緒に生活しながら、学べることも多いんじゃないかと…。ヤマト先生も連載が始まったら、アシスタントさんを付けてもらうことになりますからね。佐々木先生には了解をもらっているんだけど、ヤマト先生はどうですか？」
担当の申し出は純平には願ったり叶ったりだった。
「お願いします。何もわからないので、足を引っ張ることになると思いますが…」
「アシスタントとなると、線引きとかベタから手伝ってもらうことになるけど、かまわないかな？」
「もちろんです。今まで独学というか自己流でずっとやってきたもので、先生と呼べる方もいません。佐々木先生を師匠と思って一生懸命勉強させてもらいます。よろしくお願いします」
こうしてデビューまでの半年間、佐々木先生のもとに居候させてもらい、背景の手伝いをしつつ、プロの漫画家として必要な技術はもちろん、自営業となるため、税金対策を含めた確定申告に必要なこととか様々な細かいことも教わることになった。
純平は自己流でペンを使っていたため、妙な癖がついていてなかなか線を引くのが難し

かった。直線と言っても、細い線や太い線がある。定規を使ってもまっすぐな線は引けなかった。今まで何気なく引いていた線もプロとなると、確実な美しい線を引かなければならない。ベタにしても、むらなく同じ濃度の黒ではみ出さないできちんと塗るには神経を使う。純平は佐々木先生のもとで、自己流でやってきた漫画作りを徹底的に見直す機会を得た。

佐々木先生のところに元からいるアシスタントさん二人は絵がうまかった。ベテランの秀樹さんは三十二歳。背景を描かせると、思わずうなってしまう。存在感のあるリアルな背景を描けるのは遠近法や光をとらえられてるのだろう。奥行きのある構図には目を見張るものがあった。掛け持ちで他の先生のところでもアシスタントをしているせいで超忙しそうだった。以前は漫画家として何本か書いていたみたいだけれど、どこかで漫画家を断念したのだろう。今は一生プロのアシスタントで生きていこうとしていた。画力はそこら辺のプロの漫画家以上のものを持っているが、ストーリーを生み出す力が弱いのだろうか？　ここでも、画力だけでは漫画家になれないことを思い知った。秀樹さんは料理の腕も相当なもので、ペペロンチーノなどのパスタを作らせるとプロ顔負けのおいしさだった。彼がアシスタントに入る日はみんなご飯を楽しみにしていた。

もう一人のアシスタントは唯ちゃんという若い女の子で、東北の有名な漫画の専門学校出身だった。柔らかい線画が得意だった。彼女は漫画家志望で、あちこちの少年誌の懸賞に応募しているようだ。佳作には入ったことがあるらしい。明るい性格で体力もあるので、男三人に囲まれていても、言いたいことを言って、バンバン仕事をこなしていた。

絵のうまい人は嫌というほどいるが、書きたいものを持っている人は案外少ないのかもしれない。原作と絵が違う漫画がいつの時代でも何割かを占めているのも納得できた。純平はアシスタントを使うのは名の知れた漫画家だけだと思っていたが、実際は新人にもアシスタントはついた。出版社が手配してくれるようだが、純平の場合、佐々木先生のところに居候しているので、先生のアシスタントさんを共同で使わせてもらうことになるらしい。

漫画の内容については担当の木島さんと話し合うことが多かった。その木島さんは佐々木先生とは旧知の仲ということで、佐々木先生のネーム作りの初めの段階からかかわるばかりでなく、画力にも自信があるのか、背景なども描こうとするのが純平には理解できなかった。もちろん担当とはアイデアのすり合わせをしたり、助言をもらったりすることはありだが、木島は自分の漫画論を滔々と語り、自分の考えてきた陳腐なストーリーをむりやり通そうとするようなところが見られた。絵も直線すら描けておらず、彼の描いたところは直さなければ使い物にならない有様だった。佐々木先生は温厚な人柄だったので、木島に対しても、「困ったやつだ」程度で済ましていたが、純平から見ると、木島は独善的で自信家で鼻持ちならない人物にしか思えなかった。だから、純平のネームに関する彼のクレームには決して屈しなかった。そうなる必然性がなければ、安易にバトルシーンを入れたくなかったし、自分としては完結までの流れを見て描いているのに、何も知らない担当にとやかく言われたくなかったのだ。そんな純平の態度は木島の目には「新人のくせに生意気な奴」に写ったようで、佐々木先生の作品にかかりっきりになり、純平の新連載には関心を示さないようになった。皮肉なことに純平の仕事は木島とすり合わせをしているときよりもはかどった。

六月には予定通り、純平の新連載「アオニヨシ」が月刊「プライド」で始まった。その月の表紙も純平のキャラクター「スサノオ」が飾った。母親は早速あちらこちらの書店で「プライド」を購入し、アンケートを出し、感想をメイルで送ってきた。

「線はシャープできれいだけど、背景が寂しいっていうか描けてない気がする。内容はちょっと難しいな。小学生とか無理と違う？」

母らしい厳しいコメント。父は怖くて読んでいないらしい。「意気地なしなのよ」とは母の弁。

新連載は好調な滑り出しで、人気投票でも五位の票を得た。弱点である背景を充実させるべく、アシスタント料を払うのはきつい状況だった。連載を始めて半年後にはコミック本も出版してもらえることになった。これまで月刊誌で連載してきた分を集めて一つの単行本にするのだ。純平はペンが遅かったので、月刊誌に三十ページ、描くのでさえのつこつなのにコミック本出版にあたっては、少々の手直しと表紙も考えなければならず、プラスアルファの仕事もふえるわけで、これも初体験だったのであたふたと大忙しだった。その分収入は入ってきたのでうれしかった。売れっ子漫画家になると、週刊誌や月刊誌、単行本など重なるわけで、一か月に一体何ページこなしているのか想像するだけで気が遠くなった。

コミック本が出ると、出版社が大手書店でサイン会を催してくれた。サイン会など、これまた初めての経験なので、何を着ていけばいいのか、どんなサインをすればいいのか、何を言えばいいのか見当もつかなかったので、佐々木先生に尋ねた。

「着ていくものは清潔なジャケットとパンツでいいんじゃないか？　それよりもその頭どうにかしたほうがいいよ。髭もね。サインは相手が描いてほしいキャラとか聞いてもいいし、別に話すことはないんじゃないかな？」

実際純平は髭が濃かった。朝剃っても、夕方にはブツブツ出てくるし、剃り跡も青かった。髪は長い間散髪に行っていなかったので、鏡をまじまじ見ると、妙な癖毛が伸びてきて、あちこちで渦をまいていたし、横の髪は張り出して、かなりいけてない状態だった。慌てて理髪店に行き、切ってもらいさっぱりとし、デパートで服を買った。服を買うなんて行為は、しかも、デパートで買うなんて、ずいぶん昔にしたきりだなと感慨深かった。

当日は時間前に割合たくさん集まってくれたので、整理券を出すことになった。定刻になると、小さな机に座り、サインペンを持ち、本を買ってくれた人にイラスト入りサインを書いて握手した。緊張していて何を言ったのか全く覚えていないが、口がカラカラに渇いて、上唇が上の前歯にくっついて、口が閉じられない状態に何度かなってしまった。トータルで百人近く来てくれた。自分が自分のサイン会でサインしているなんて、夢の中にいるようだった。

プロの漫画家になれたと浮かれていたが、コミックの一巻が出ると、２チャンネルにボロクソに書き込まれた。２チャンネルというのはいろいろなことや物や人に対して匿名で無責任に好き勝手なことを書き込むサイトで、中傷の場になっているのを純平は知っていたので、チラッとしか見なかったが、実家の母はきっちり見たらしい。母は怒り狂いながら電話してきた。

「自分は何も創り出せないくせに、浅い読みで作品をこなしまくるなんて、人のすることと思えないわ。しかも、匿名だよ。ひきょうでかわいそうな奴らだね。だいたい本とか映

画とか何にでも評論家っているけど、そんだけ偉そうに批評するなら、自分で創り出してみればっていつも思ってしまうのよ。その作品や作者に対して愛情がある場合の建設的な批評は意味あるけど、上から目線で切って捨てるようなコメント書く人は人格的にどうかと思うわ」

２チャンネルの書き込みへの批判が批評家全体に対するバッシングに発展し、そうすることで純平を励まそうとしているようだった。確かに本物の批評家は少ないような気がする。批評家というのはその分野に精通した勉強家で、常にニュートラルな立場で批評しなければならない。それを自覚しているかどうかで批評の内容もずいぶん変わってくるだろう。映画会社や出版社に媚びてはいけないのだ。そんな本物の評論家はどれだけいるのだろう。少なくとも、２チャンネルに投稿するような輩は自分の書いたことに対して責任なんて持つとは思えない。２チャンネルの性格をよく知る純平は母に説明した。

「お母さん、２チャンネル、見たら、血圧上がるよ。そのサイトは無責任になんでも言うところだから気にしないでいいよ」

「何とかというロボット漫画の二番煎じだとか、全然理解してないから腹が立つのよ。的外れな中傷は己の無教養を曝すだけなのにね」

母の鼻息は荒く、なだめるのに苦労した。純平は２チャンネルの書き込みに傷つく部分もあったが、逆に元気づけられる一面もあった。小さな出版社の新人漫画家が描いたものにいろいろな反応が返ってくるものだと感心したのだ。結局みんな漫画を読んでくれたわけだから。そして、何か言いたくなったんだと考えると、励まされた。ただ、一つ気になるコメントがあった。「この漫画家のイラストはとってもかっこいいのに、漫画になるとこの程度なんかな？」というもので、心にズキンときた。しっかりした内容のものを書かなければならないと強く思った。

コミック本が三巻出るころになると、創作のリズムもできてきて、絵もそれなりに上達してきた。アマゾンの評価でも星四つ以上もらえるようになったし、サイン会を開くと、いつも来てくれるおばちゃんの顔を覚えたり、書店の広報担当の人と冗談を言えるようにもなった。ただ、ずっと佐々木先生のアパートにやっかいになってる状態が思った以上に長引いているので、自分のアパートへは郵便物を取りに帰るだけになっているのは少し気になっていた。

佐々木先生宅での居候生活は楽しかった。締切近くになると、先生もアシスタントさん二人もコーヒーを飲みながらの徹夜作業が続き、みんな目に隈を作って、黙々と手を動かすという鬼気迫る状況になるが、原稿を担当さんに渡してＯＫがもらえたら、その日は爆睡し、次の日は飲みに繰り出す感じだった。純平は昔、アルコールは全然だめだったが、今ではビールを皮切りにワインも日本酒も焼酎もなんでも来い状態になっていた。たばこも覚えてしまい秀樹さんのおいしいご飯も手伝って、不健康なメタボ体型になりつつあった。アシスタントさんたちとは各々の誕生日に小パーティーをして、プレゼントを贈りあった。ゲームソフトや好きなコミック全巻などをあげたりもらったりした。秀樹さんのほっぺたの落ちそうなパスタや唯ちゃんの焼いたハート型のクッキー、純平の用意したゴディバのチョコレート、佐々木先生の買ってきた乾きものなど、いろんな食べ物と仲間の笑顔に囲まれて、とても幸せな日々だった。

共同生活をしていると、情が移って、家族愛的な感情が生まれるものだが、佐々木先生

は若い唯ちゃんにほのかな恋心を寄せているようだった。彼女が来る日には髭を剃り、こましな恰好をして、上機嫌で原稿に向かっている。はたから見ると、不器用なアプローチにあきれてしまうのだが、先生は大まじめに、彼女のために、かわいいマグカップやバスタオル、専用枕まで用意した。そして、彼女には満面の笑みを浮かべて接していた。唯ちゃんのほうは少々鈍感なのか、先生の好意を保護者のそれと受け取っているのか、「ありがとうございます」の一言で、様々な小さなプレゼントを当たり前のように受け取っていた。

ある日、先生があまり凹んでいるので、どうしたのかと尋ねると

「唯ちゃんに告白したんだけど、あっさり振られちゃったよ」ということで、「これからもアシスタントとして使ってください」と言われたらしい。今どきの若い女の子はサラッと振るんだなと純平は恐ろしくなった。先生の失恋の痛手は時間とともに癒され、またいつものようなノリの日々か戻ってきて、純平も秀樹さんも安堵した。

また、プロの漫画家になったことで、いろいろな出版社のパーティーに招かれる機会もできた。今まで雲の上の存在だった尊敬する漫画家の先生たちにも会えた。中でも「ジョジョの奇妙な冒険」の荒木飛呂彦先生を間近に見たときは感動のあまり卒倒しそうになった。先生は普通に礼儀正しく謙虚な方だった。挨拶するのが精いっぱいで何をしゃべったのか覚えていないが、漫画家になってよかったと思う瞬間だった。

十五、独立

そんなとき、二人の担当だった木島が「ビッグヒット」を辞めることになった。上と意見が合わないとか言っていたが、本当のところは自我が強すぎて一人浮いていたのだろう。その際に友達でもある佐々木先生も、今度自分の移る出版社に連れて行こうとした。つまり、今「ビッグヒット」に連載している漫画を適当なところで打ち切って、新しい出版社で新連載を始めてはどうかという話だった。純平は、そんな話に佐々木先生がまさか乗るとは思わなかったが、毎回ネームのアイデアを木島に頼っていた先生は、結局、木島と一緒に違う出版社に行くことに同意した。そうなると、純平とは接点が無くなってしまう。先生は言いにくそうに話を切り出した。

「純平、そろそろうちから出て行ってくれないか。おまえも自立して一人でアシスタントを使い、漫画を描いていく時期に来てるだろ？　いつまでもここにいるわけにもいかないしな」

しばらくアシスタントとして先生のもとにいるつもりが、優しい先生につい甘えてしまって、ズルズル居ついてしまったことを心苦しく思っていたので、純平も踏ん切りがついて言った。

「長い間お世話になりました。新連載が始まるまでの半年の間だと思っていたのに、つい長居をしてしまいました。優しい先生に甘えてしまいました。すみません。このご恩は一生忘れません。これからも先生は僕の漫画の師匠です。ありがとうございました」

先生もしんみりと言った。

「いろいろ助けてもらったし、一緒に仕事ができて刺激にもなったし。お互いいい経験をしたね。楽しかったよ。ありがとう。これからも何か困ったことがあったら、聞いてほしいな」

純平は先生に心の底から感謝していた。でも、いつまでも居候していてはいけないと思っていたので、いいタイミングで独立することになった。ただ、独立して自分の仕事場を持つとなると、今の小さな部屋では無理だった。アシスタントさん男女二人に入ってもらうとすると、男性のほうは純平と同じ部屋で寝るとして、女性の寝る部屋を用意しなければならない。すると、仕事をするデスクを置く比較的大きな部屋と寝室となる小さい部屋が二つと台所が必要になる。また、パソコンをはじめとする電気製品や、机やいすといった家具類、布団や文具なども新しく揃えなければならなかった。かなりの出費になるが、やむを得ない。少々値が張るが南向きの日当たりのよいアパートを見つけ、引っ越すことになった。

体調を崩している母の代わりに父が手伝いに来てくれた。口では厳しいことを言うし、漫画家としての純平の能力には少々危惧を抱いているようだが、いざとなると、しっかりサポートしてくれる。新しいパソコンも買ってくれたし、支度金だと言ってお金を置いて行ってくれた。親ってありがたいものだとしみじみ思った。

仕事場の正面の少し大きな机に座ると、一国一城の主になったような気分になった。と同時に、これからは何もかも一人でやっていかなければならないという漠然とした不安と重圧をヒシヒシと感じていた。

新しい担当となった吉村さんは早速アシスタント二人を手配してくれた。一人はベテランの女性アシスタントのゆかりさん。もう一人は専門学校在学中の渡君で二人とも画力はすばらしかった。渡君は若いだけにとてもエネルギッシュで、アシスタントに入らない時は、自分の漫画を一生懸命書いているようだった。いろいろな雑誌にも応募しているらしく、懸賞の締切近くになると、アシスタントの仕事はキャンセルになることもあった。実家に住んでいるから、経済的な心配は今のところないようだ。仕事場でも、がむしゃらに絵を描いていた。一方、ゆかりさんのほうは、このままアシスタントとして生きていくか、別の仕事を見つけて、漫画から足を洗うか、進路を迷っているようなところがあった。アラサーと思われる年齢がそうさせているのかもしれない。二人とも性格も優しくて明るいし、画力は申し分ないので、得難い戦力となった。

コミック本の八巻めが出たころ、純平の属する「ビッグヒット」が潰れそうな状態に陥った。原因は広報が働いていないとか、ターゲットの絞り込みが甘いこととかいろいろ考えられるが、連載漫画の力が弱いというか質が低いことに尽きた。やたら残虐な殺戮を繰り返し、血潮が噴き出す場面が多い漫画や何の必然性もなくおっぱいやお尻を出すシーン満載の漫画とか。読者受けを狙ったのだろうが、それが裏目に出て、読者離れが進んだのだ。読者を馬鹿にしてはいけない。絵もストーリーも一定レベルに達していない漫画がいくつも載っている分厚い月刊誌など誰が買うというのか？　サイン会すらなくなってしまい、連載している作家たちは気が気ではない様子だった。連載を持っていない漫画家は漫画家とは呼べないのだ。

噂では半分ほどに連載を削り、本誌に残れなかった漫画はネット配信することになるらしい。本誌に残れるかどうかは毎月のアンケートの人気投票で決まるという話だった。純平は今連載中の「アオニョシ」が完結するまで紙の雑誌でやりたいと思っていたので、吉村さんから純平の漫画は本誌に残ると聞かされた時はホッとした。純平は連載が始まった時から、コミック本十巻で完結するよう決めていた。最後打ち切りでバタバタと終わらせ

ず、勢いを維持したまま、静かに終わらせたかった。どうやらその思いはかなえられそうだった。

十六、新しい出版社

しかし、「アオニョシ」の連載が終わったら、このまま「ビッグヒット」でまた新連載をやれるのか、やっていっていいのか不安を感じ始めた。ちょうどそのころ、大手出版社から高校生向けの月刊誌に読み切りを書いてみないかという誘いを受けた。格闘漫画が完結するので、その後釜に連載する気はないかというのだ。純平は格闘物よりほんわかした青春物を描きたかったが、今連載されているバトル物が評価されての誘いだし、大手出版社に連載できるチャンスだと考えると、ぜいたくは言ってられなかった。連載候補に五人の漫画家が上がっていて、まずネームを出してもらって三人に絞り、各々の作品を読み切りの形で載せて、人気のあった作品の作者に連載をお願いするというかなりハードな条件だった。自分の力を試したかったので、応じることにしたが、期待はできなかった。というのも、今回終わる格闘漫画は戦闘中心で、人間同士の心の交流や葛藤などほとんどない乾いたドラマだったので、その後釜となると、同じようなテイストが求められるが、純平の漫画は少しウエットで、テイストがかなり違っていたのだ。それでも、持てる力を精いっぱい出して物語を作った。読み切りなので、連載物より単純な話になり、評価は分かれた。分かりやすくておもしろかったと感じる人と、物足りないと感じる人がいたのだ。内容も戦闘を前面に出すのではなく、青春物の中にバトルが入っているような出来上がりになったので、連載は他の人に決まった。が、同じ出版社の月刊誌で、ターゲットの異なる雑誌に連載してみないかと言われた。少し個性的な漫画をマニア向けに提供しているような雑誌だと言われた。純平は悩んだ。今属している出版社は弱小で経営が危なそうだが、まだ連載が続いている以上、手を抜くわけにはいかない。自分の性格からいって、二つのことを同時にするのは無理じゃないかと思う。迷ったときはつい実家に電話してしまう自分をふがいないと思いつつ、指は実家の電話番号を押していた。母が出た。

「純平？　元気にしてる？　何かあった？」

何かあった時にしか、電話しないものだから、母は心配そうな声を出した。

「元気にしてるよ。あのね、秀明社から月刊誌に連載しないかって話をもらったんだけど」

「秀明社！　すごいじゃない？　大手出版社でしょ？」

「うん、でも二つも掛け持ちできるかな？」

「月刊誌だったら、二つでもなんとかなるんじゃないの？」

「簡単に言うけど、一か月に三十枚を二つって、僕にはきついんだよ」

「だけど、『ビッグヒット』はちょっと危ないんでしょ？　それに月に一本だけでやっていけるの？　家賃もかなり上がったし、アシスタントさんたちへの支払いもあるし…。二本くらいこなせないと、生き延びていけないんじゃない？　完璧なものを提供したいって気持ちはわかるけど」

「そうだよね。原稿料も倍近くくれるって言うし」

「えっ！　倍？　やるべきでしょ。チャンスなんだから。もちろん今断っても、またチャンスは来るかもしれないけどね。やっぱ今でしょ？」

父や兄弟に聞いても、みんな口をそろえて答える。

「何迷ってるのよ。こんなおいしい話、ボツにしたらダメでしょ。週刊誌に描くこと思ったら、まだずいぶん楽でしょ！」

純平もみんなの言葉を聞いていると、迷ってる自分がおかしいような気になって、新連載を引き受けることにした。早速鈴木という担当がついて、ヤマト先生の描くソフトバトルの線でネームを出してほしいと言われた。純平は急に忙しくなった。「アオニョシ」のネームを描き上げ、ペン入れをして背景やスクリーントーンをアシスタントさんに任せ、新しい連載のネームにとりかかった。アシスタントの渡君は「ひえー！　俺たちこれから二つ仕上げることになるんすか？　やばいよ。ゆかりさん、大丈夫っすか？」なんて言いながら楽しそうだ。ゆかりさんは何事にも動じない落ち着きで、一言。「プロですもの」

純平はそんな二人のために栄養ドリンクや目覚ましドリンクを買い込んだ。

今度の連載では高校生くらいの女の子を主人公にして、北海道の離島に伝わる伝説や言い伝えを軸に離島の自然や地元の行事などもからめたストーリーを考えていた。バトルだけじゃなく、それとなく友情や初恋なども入れていくつもりだった。鈴木さんに連載の構想を話すと、「じゃ、北海道に取材旅行にいきましょう！」ということになった。さすがに大手はやることが違うと感心した。それほど時間はとれないので、北海道の離島を中心に四泊五日の旅のスケジュールを組んでくれた。まず飛行機で千歳まで飛んで、その日のうちに稚内から利尻島に移動して一泊。礼文島に移って一泊。そこから、稚内経由で小さな天売島によって一泊し、札幌にもどってゆっくり観光して一泊し、帰ってくるのはどうかと提示してきた。ＯＫを出すと、二日後、飛行機のチケットを持って、鈴木さんが玄関に立っていた。男二人の取材旅行。純平は初めて訪れる北海道のガイドブックを買い、興味のある場所やイベントに丸印をつけた。ただ、離島なので移動に案外時間を取られるため、余り欲張った計画はできなかった。

島はそれぞれ美しく魅力的だった。まず、利尻島では利尻富士に登った。宿泊客の希望者は、あたりはまだ真っ暗な四時に起床し、おにぎり弁当とお茶を用意してもらい、ガイドさんに案内されて、山に登り始めた。八月といえども朝はさすがに冷えるので、ジャンパーを羽織って出発した。日頃運動とは縁のない純平にとっても、純平よりメタボ度の高い鈴木さんにとっても息の上がる登山だったが、登るにつれてあたりが白々と明けてきて、ご来光を見た時には、その美しさ、神々しさに素直に感動した。ねずみ色の雲の間から光が差して、一枚の絵のように感じ、カメラに収めた。頂上まで行って頬張った梅入りおにぎりのおいしかったこと！　ガイドさんから利尻富士にまつわる悲しい恋の話も聞けて、しっかりメモをとった。

礼文島ではお花畑ハイキングに参加した。純平はクロユリやエーデルワイスなど珍しい植物を見ながら、鈴木さんはグループで参加していた若い女の子たちを横目で見ながら、四、五時間歩いた。天気にも恵まれ、きれいな写真がたくさん撮れた。

帰りに寄った天売島はここで暮らしたいと思うほど、純平の琴線に触れた。小さな島の海に面した崖にはウトウという鳥が巣を作っていて、夕方になると、一斉に帰ってくる。崖の上からたくさんのウトウが鳴き交わしながら、飛び回る様をみていると、一瞬ヒッチコックの恐怖映画を思い出し、怖くなったが、この島の鳥たちはそんな恐ろしい鳥たちではなかった。人懐こくもないが、人を襲うでもなく、自然にそこにいた。手つかずの自然の中で、純平は崖の上でいつまでもウトウの飛び交う様子を見ていた。

民宿のおばあさんも何事にも鷹揚にゆったりと暮らしているようだった。夕飯には素朴な魚料理や煮物を出してくれた。ウトウと島の少女の不思議な話も聞けて、純平は大満足だった。

「夏は雨が降らんから、島は水不足になっとる。悪いんじゃが、風呂では頭、洗うの我慢してくれんかの？」

おばあさんにそういわれた二人はなるべく水を使わないよう努力した。風呂もカラスの行水で、汗を流す程度にした。多少不便でも、鳥のたくさん暮らす長閑な島はとても魅力的だった。その魅力に取りつかれたのか、その民宿には外国の男の子が居候していて、民宿の掃除や料理作りなどを手伝っていた。おばあさんとその男の子の穏やかな静かな日々がそこには存在していた。純平もそのまましばらく残りたかったが、取材目的を忘れてはいけないと自分を叱った。

帰りは札幌でジンギスカンとビールなどを楽しみ、アシスタントに六花亭のお菓子と札幌ラーメンを買って、飛行機で東京に帰り着いた。東京は蒸し暑かった。じめっとしていて、空気が肌にまとわりついて、ムアッと息苦しかった。北海道も暑かったが、性質の少々異なる暑さだ。

取材旅行のおかげで、たくさんいい写真が撮れて、ストーリーの背景などつかめて、描きたい意欲が高まった。机の上でネットで知りえることも多いし、便利だが、やはり外に出て、実際にそこの空気に触れて得るものは大きいと感じた。鈴木さんに感謝した。

「付き合ってくれてありがとうございました。いいものが描けそうです。期待していてください」

「先生のイメージが膨らんで、モチベーションが上がってよかったです。ストーリー作りに必要な資料があれば、何でも言ってください。わたしでできる範囲でご用意します。連載よろしくお願いします。旅行楽しかったです」空港で二人は別れ、純平はアパートに向かった。部屋に入ると、窓を開け、風を通し、汚れ物を洗濯機に放り込むと、新連載のネームを描き始めた。主人公の茜が一人動き出し、純平を引っ張っていく。「おいおい、どこに連れていくの？」茜に尋ねると、純平は漫画の中に入って行った。

アシスタントさんに入ってもらう日、北海道土産の札幌ラーメンを作ってごちそうした。ゆかりさんがもやし、ネギ、チャーシューにメンマを買ってきてくれたので、豪華なラーメンになった。渡はラーメンにがっつきながら、言った。

「やっぱ札幌らーめん、うまいっすね。トッピングもいっぱい乗ってて最高！　北海道いいな。俺も行きたかったな。離島なんてロマンがあるっすよね」

「いいところだったよ。天売島にはウトウという鳥が群生しててすごかった。民宿のおばあさんもいい雰囲気だったし」

「取材旅行なんてあるんっすね。大手は違うな」

「ゆかりさん、元気ないね。どうかしたの？」

さっきから何か考えるように何も言わず、ラーメンを食べているゆかりを気にして純平が尋ねた。

「えっ？　友達が沖縄でカフェ開くから、手伝ってほしいって言われてて…」

「それってアシスタント、やめるってことっすか？」

渡が驚いて箸を止めた。純平も内心ドキッとした。

「ずっとこのままアシスタントを続けるのはどうかなって思うの。生活も不安定だし。若い頃は絵が描けるだけで楽しかったけどね」
「絵描くの嫌になったんすか？」
「絵を描くのは好きよ。それしかできないって感じだな」
「ゆかりさんの描く背景って抒情的っていうのかな、雰囲気があるんだよな。ヤマト先生のストーリーにぴったりだと思う」
「ありがとう。私もヤマト先生の漫画、手伝えるのは楽しいのよ」
「ゆかりさんの人生だからね。僕らがとやかく言えることじゃないけど、なんか漫画から遠ざかるのは惜しい気がするな」
純平は揺れるゆかりの心が痛いほど分かるだけに、
「しっかり考えてください。後悔しないように」としか言えなかった。
秀明社の新しい月刊誌「ヤングステップ」が発売され、純平の「闇に棲むもの」が連載を開始した。母は近所の書店で手に入れ、感想をメイルしてくれた。
『『アオニョシ』より読みやすいから、すっと入っていけたよ。今回はお父さんも神棚に供えておいたのを読んで『なかなか面白いな』って言ってたよ。どういう風の吹き回しだろうね」
やっと父に認めてもらえたようで、目頭が熱くなった。漫画としてどこまでやれるか分からないが、漫画一本でやっていこうと決心した。

十七、描きたいもの

新連載「闇に棲むもの」はその月の人気投票で三位になった。有名なベテラン先生の作品も多い中での三位はかなり健闘したと言えた。純平は取材旅行までして取り組んだ作品が評価されてとてもうれしかった。しかし、翌月には七位と後退してしまったので焦った。常に十位以内に入るには各月に見せ場を作らないといけないのではと話作りに工夫するようになった。そうこうしているうちに、「プライド」に連載している「アオニョシ」が最終回を迎えた。自分の思うように物語を持って行けたので、やり遂げた満足感があった。担当の吉村からは「プライド」で次の連載も考えてほしいと言われたが、このまま続けていいものか迷った。会社全体の体制が整っていない上に人材も不足しているようだった。吉村に本音を話すと、彼はある程度会社の弱点を認めながらも、一生懸命反論した。
「連載を半分入れ替えて、もう少しターゲットを年齢の高い読者にしようとこちらも頑張っています。実際編集者の数が足りていないので、作家先生の掛け持ちが多く、いたらない点もありますが、人事のほうもかなり入れ替えがありましたので、新しい体制になりそうです。先生方にはご心配、ご迷惑をおかけしましたが、「プライド」も変わりますよ。ヤマト先生には生まれ変わった「プライド」でぜひ新連載していただきたいと思っているんです」
「では、今回は僕の描きたいものを描いてもいいですか？」
「どんなものをお考えですか？」
『『プライド』で特別に一回読み切りで描かせてもらったような青春物を描きたいのですが…」

「ああ、あの読み切りはヤマト先生の連載中のものとは全然テイストが違ってたのに、好評でしたよね。そうですね。今回はあの路線で攻めましょうか？」
純平はずっと温めてきた題材がやっと描けそうなので、俄然やる気が出てきた。
「じゃ、ネームができたら、連絡しますので、よろしくお願いします」
「こちらこそ。また先生と仕事ができて僕もうれしいです」
アシスタントのゆかりと渡にも、「プライド」で青春物の新連載が決まったことを伝えた。
「よかったっすね。先生の望みが叶って。俺もがんばります」
「おめでとうございます。エロ、グロなしの青春物って最近少なくなってますよね。あえてそこ行くんですね。チャレンジのし甲斐がありますね」
ゆかりも久々にやる気を見せた。
新連載のお祝いに三人で小パーティーを開いた。ゆかりがピザを焼いてくれるというので、渡と純平は飲み物を買いに走った。サラミにソーセージ、アボガドにズッキーニとトマト、その上にチーズがたっぷり乗ったピザは最高におしいかった。
「うんまい！　ゆかりさん、料理できたんすか？　このピザすごいよ」
「トマトも焼いたらおいしいね。栄養たっぷりだ」
「よかった。みんな野菜不足でしょ？　しっかり野菜摂らないとね。先生も中年体型になってきたし」
「まだ三十なんだけどな」
「じゃ、あたしより三つ下なんだ。なーんだ、もっと年上かって思ってた。渡はいくつ？」
「俺？　俺はまだ二十二ですよ。青春真っ只中って感じ。そうだ、この前草思社の漫画賞で佳作に入ったんすよ。もう一息頑張って入賞するぞ！」
「やったね。入賞すれば、読み切りで載せてもらえるものね。渡、がんばれ！　姉ちゃんも応援するよ」
「ありがとう。ゆかりさんはどうするの？　沖縄行き、決めたの？」
「それね、まだはっきり返事してないんだ」
「カフェの手伝いなんて、ゆかりさんじゃなくても誰でもできるじゃん？」
「でもね。昔からの友達なの、カフェ開くの。漫画も好きなんだけど、このままアシスタントで生活していく根性も座ってないんだよね。優柔不断なんだ、わたしって」
「ゆかりさんにとって今が人生の岐路なんだから、迷うだけ迷えばいいと思うけど、僕は残ってほしいと思ってる。無責任かも知れないけど…」
「俺もそう思う。あんな背景描ける人、いないよ」
渡の次回の応募作品の構想や純平の新連載のキャラクターの話とかしながら、ビールを飲んで、ピザをたらふく食べて、純平と渡は寝てしまった。無防備に大きな口を開けて、ガーガーと眠りこける二人を見て、ゆかりは母のような微笑みを浮かべた。汚れた皿と飲み散らかしたビール缶を片付けると、ゆかりはそっと部屋を後にして、寒い通りに出た。駅前にはクリスマス前だからか、もう十一時を回っているというのに、たくさんの人がいた。いやにカップルが目についた。みんな幸せそうに寄り添って歩いている。三十三歳、定職なし、恋人なしの自分がみじめになってしまった。
中学からの友達の亜由美が三か月前に隼人と結婚した。二人を結びつけた思い出の地、沖縄でカフェをはじめようと思うのだが、ゆかりに手伝ってもらえないかというメイルが

来た。ゆかりが隼人と以前付き合っていたことを亜由美は知らない。結婚の約束までしていた二人が別れたのがゆかりの出生に関する隼人の母親の頑なな偏見にあったことも知るはずがなかった。隼人のことを今も引きずっている自分が二人の家庭に入っていってもいいのだろうか。沖縄という場所は魅力的だが、わたしの心の中に隼人のそばにいたいという気持ちがある以上、わたしが二人の新婚生活に入ると、三人とも不幸になるのは見えている。それなのに、まだ返事をためらっているのは私の中に悪魔がいるからなんだろう。あの部屋で眠っているあどけない二人のもとにとどまったほうが、きっと幸せなんだろうけど…。ゆかりの心はまだ揺れていた。

純平は月に二本の連載というペースが定着してきて、生活のリズムも整ってきた。時間を見つけて、ジムにも通いだした。風呂上がりに鏡で自分の腹回りなどを見ると、少々やばいと感じたからだ。午前中にジムに行くと、おじいさん、おばあさんが一生懸命汗を流している。ウォーキングマシーンもバイクのマシーンも八割方年寄りに占領されていた。月に八千円足らずでマシーン、プールは使い放題だし、エアロビクスやヨガやフラダンスのレッスンもただで受けられるのだから、人気があるのもうなずける。お年寄りの中で一人頑張るのはちょっと遠慮したかったので、夜に行ってみると、さすがに夜は勤め帰りのサラリーマンやＯＬと思しき人たちでにぎわっていた。純平は週に三日ほど、夜に来てヨガに参加したり、マシーンで汗を流した。ジムのバイクをこぎながら、なぜかゆかりのことを考えていた。沖縄にはゆかりの心をひきつける何かがあるようだ。沖縄の自然なのか他の何かなのか分からないけれど。ただそれがゆかりを幸せにするものかどうか疑問だ。アシスタントとしてのゆかりが抜けるのは純平にとって大きな痛手になるのは事実だが、彼女が幸せになれるのなら、喜んで旅立たせてやらなければならない思う。しかし、ゆかりがいなくなるなんて想像できなかった。そのくらい彼女の存在が純平の中で大きくなってきていたのだ。

十八、クラス会

正月には三十歳になったお祝いの会ということで、高校のクラス会があった。純平も実家に帰っていたので参加した。

男子は年相応におっさん化し、女子は化粧も手伝ってみんなきれいになっていた。もちろん妙におばさん化している残念な子もいたが。

信州の大学に進んだ達也は相変わらずぽっちゃり体型でニコニコしていた。大学では、スキーにも励み、スキーを教えるライセンスも取ったらしい。今は高校で物理を教えているそうで、生徒に対する不満を口にした。

「今どきの高校生はよく分からんよ。スマホばっかりいじってる。ゲームとかラインとかやってるようだけど、ラインはつながりが広がりすぎると、ラインに生活が支配されるようだ。返信すぐしないと怒られたり、仲間外れにされかねないから、毎日何十、何百って返信してる。かわいそうな状態だよ」

真守も共感する。

「便利なものでも使い方を間違うと、囚われの身になってしまうのかもな」

「分かっているんだけど、どうしたら、この深刻な状況を改善できるのか分からないんだ。

ほんとに危機感あるよ」
「スマホを取り上げるわけにはいかないのか？　それしか方法はないんじゃないかと思う」
「そうなんだ。俺らの高校時代はスマホなんてなくても、生活できてたよね。もっと自分の時間もあった」
「うん。子どもには、まだその便利なマシーンをうまく使いこなすことは無理だと思うよ。大人だって怪しいもんだよ」
「あんな高価なおもちゃ、子どもには向いてないんだ。早く手を打たないと子どもたちが壊れちゃうよ」
「それはそうと、そんなわけのわからない高校生の教え子と去年結婚したんだよな。達也先生」
　祐介がからかう。
「由美はおとなしい普通の女の子だよ。去年大学卒業を待って、二十三歳で結婚したんだから、未成年と結婚したわけじゃないよ」
「えーっ！　教え子と？　ロマンチックだね。たっちゃん」
　純平は羨ましそうに言った。
「教師になったばかりの冬、物理クラブの連中を僕の第二の故郷でもある信州に連れて行ったんだ。そこで、スキーやソリ遊びなんかして楽しかった。そのメンバーの中に由美がいたんだよ」
「かわいいだろうね、奥さん」
「うん、かわいいよ」
「ごちそうさま。祐介はどうなんだ？」
　純平は祐介に話を振った。
「俺はお前らと違って、一足早く社会に出たからな。同僚と三年前に結婚して、もう娘がいるよ」
「えーっ！　祐介に子どもができたのか？　確実に時は経ってるんだな」
「もう俺ら三十なんだよ」
「結婚して、子どもがいても不思議じゃない年だね。娘ってかわいいって聞くけど、どう？」
「目に入れても痛くないってよく言うだろ？　前はそんな馬鹿なって思ってたけど、まさにその通りだな。今一歳になったところなんだけど、『父ちゃん、父ちゃん、あっこ、あっこ』って。少ししゃべれるようになってきたし、娘の顔を見ると、一日の疲れがも吹っ飛ぶよ。俺、小さい子どもって好きじゃないっていうか苦手だったけど、自分の子どもできてから、どの子もかわいいと思えるようになったよ」
「成長したんだな。祐介はどっか冷めてる感じしてたから、マイホームパパになるとは思わなかったよ」
　純平は驚きを隠せなかった。
「俺は地道に生活していくことが一番だと思ってるんだ。特別な才能もないし、何か一生をかけて、やり通したいと思えるものもないしな。真守はどうしてる？　あのＩＴ関連の会社にいるのか？」
「いるよ。ＩＴの会社はどこへ行っても、忙しいみたいだしな」

「結婚したのか」
「いいや。でも、付き合ってるっていうか、ほとんどいっしょに暮してる彼女はいるよ」
「同棲ってこと？」
「ああ」
「結婚しないのか？　相手は幾つなんだ」
「俺より二つ上なんだよ。うちの母と会わせたんだけど、全然合わないんだ。うちの母は相手が年上ってだけでも、嫌悪感持つからね。彼女の何もかもが気に入らないみたいだ。っていうか、俺を結婚させたくないのかなって思うよ」
「お母さんが結婚そのものにに反対してるのか？」
「ああ、俺もさ、本当にこの女と結婚していいのかなって思うときもある。付き合いだして、二か月くらいで結婚のこと、口にしたんだ。まだお互い何も知らないのにさ。結婚なんて言う？」
　祐介が脅かす。
「おまえ、蜘蛛の巣にひっかかったんじゃないのか？　三十二のジョロウグモは手ごわいぞ」
「そんな恐ろしい女じゃないと思うけど、母もそんなこと言ってたな。俺、一人っ子だからさ。母親がなかなか離れてくれないんだよ」
　純平は首を傾げながら言った。
「真守のとこ、お母さんとお父さん、仲いいんだろ？　息子にそんなに執着するのかな？そんな感じしなかったけどな、おまえのおぱちゃん」
「見かけじゃ分からないよ」
　祐介がまた恐ろしいことを言う。
「真守の結婚は前途多難だな。その子と結婚するにしても、別れるにしても、修羅場になりそうだな」
「やめてくれよ」
　達也は隣に座ってみんなの話を聞いているまどかに声をかけた。
「まどかはお寺を継いだのか？」
「まだ、継ぐかどうかも決めてない」
「継がなくてもいいのか？　お寺はどうなるの？」
「母親は『好きな人がいれば、結婚して家を出てもいいよ。お寺は修行してる男の子に継いでもらうから』って言ってくれるけど、父親は預かってるお坊さんと結婚して、お寺をやっていってほしいみたいなんだ…」
「その坊さんはまどかの好みの男じゃないのか？」
「小さい頃から一緒にいるからかもしれないけど、兄妹みたいな感じなのよ」
「相手はどう思ってるんだろう？」
「うーん、どうかな？　お寺をしきっていくパートナーとしてはいいと思ってるんじゃないかな？」
　祐介はまた乱暴なことを言う。
「じゃ、結婚しちゃえばいいじゃないか。結婚って毎日生活するってことだからね。まどかの場合、今別に好きな人はいないんだろ？　その人のこと嫌いじゃないし、ご両親も望

んでるし、うまくいくと思うけどな。白馬に乗った王子様なんて、どこにもいないよ」
「祐介は現実的すぎるんだよ。乙女の気持ちなんて分かりっこないわ。純平はどう思う？」
「うーん、やっぱ結婚は一番好きな人としたいよね。一緒にずっといたいって思えるような人と…」
「あれ！　純平、好きな人いるの？」
「ど、どうしてさ？」
「なんか実感こもってたよ。で、純平は何してるの？　漫画描いてるの？」
　真守が話に飛び込む。
「ヤマト先生なんだよ。プロの漫画家になったんだよ。アシスタントとかもいるんだよ」
「へえ！　夢を実現させたんだ。なんていう雑誌に描いてるの？　ペンネームとかもあるの？」
「ペンネームは『ヤマトタケル』、『ビッグヒット』という出版社の月刊誌『プライド』に『北国の物語』、『秀明社』の『ヤングステップ』に『闇に棲むもの』って描いてるんだ。買って読んでくれよ」
「買う。買う。すごいね。なかなか夢をかなえる人っていないもの」
「でも、生活は不安定だよ。連載があるときはいいけどね」
「それはそうね。だから、結婚とかむずかしいのかな？」
「それもあるけど、出会いがないからね。ずっと家で漫画、描いてるから」
「そうか。じゃ、付き合ってる人いないの？」
「いないけど…」
　真守が純平に助け船を出す。
「まどか、純平はやめとけ。純平には年上の優しいお姉さんが合うと思うよ。アシスタントのゆかりさんみたいな」
「おいおい、やめろよ、真守。ゆかりさんとは何でもないし、第一彼女、アシスタントやめて、沖縄に行くかもしれないんだ」
「行かしていいのか？」
「彼女の人生だろ？　アシスタントとしては得難い人材だけど…」
「ほんとにアシスタントとしてなのか？」
「…」
　祐介も達也もアドバイスする。
「一緒にいたいんだろ？」
「アシスタントとしてはいてほしいけど。付き合ってもいないし」
「じれったいやつだな。おまえがぼーっとしてるから、沖縄に行くなんて言うんだよ」
「そうだよね。試しているんじゃないのか、おまえの気持ちを」
「そうかな？　彼女、自分の中で何か葛藤があるみたいだけどな」
　まどかがポツリと言った。
「ゆかりさんて、純平の大事な人なんだね」
　クラス会はみんな二次会に流れ、カラオケで持ち歌を熱唱して、ぐだぐだ解散となった。純平はクラス会で計らずしも自分のゆかりに対する気持ちを確かめる形になった。

十九、ゆかり

純平は自分の巣に帰ってきた。正月休みを取ったので、気合を入れて、ネーム二つ仕上げなければならない。一人で机に向かっていると、知らず知らずのうちにゆかりのことを考えていて、自分でも驚いた。ゆかりには自分の気持ちをしっかり伝えようと心に決めて、ネームの鉛筆を走らせた。ネームが仕上がって、キャラクターのペン入れが終わると、アシスタントに入ってもらう。渡は自分の漫画を描き上げたいからと、一日遅れで入ることになったので、きょうはゆかり一人が来た。少しやつれたようなゆかりに純平は切り出した。

「ゆかりさん、沖縄行き、決めた？」

「まだどうしようか悩んでるの。自分でも嫌になっちゃう」

「僕のためにここにいてくれないか？」

「アシスタントとしての力を認めてくれるのは、とてもうれしいけど…」

「アシスタントとしてじゃなく、僕の大切な人としてそばにいてほしい」

「えっ？」

「結婚してほしい」

「…」

「まだ付き合ってないけど、ゆかりさんとずっと一緒にいたいんだ。遠くに行ってしまうなんて考えられない。ゆかりさんのいない生活、想像もできない」

「ヤマト先生、私のこと何も知らないでしょ？　どうして沖縄に行きたいのかも」

「月に何日か一緒に生活しているから、なんとなく分かるよ。沖縄にゆかりさんを引きつける何かがあるんだろ？　自然じゃなくて、人かな？」

「えっ！　人？」

「沖縄に大事な人がいる？」

「何でわかっちゃったんだろ？」

「なんとなく…かな」

「今度カフェを開く友達のご主人の隼人って、偶然私の元カレなの」

「ゆかりさんは、今友達の旦那さんになってる元カレのところに行くかどうか迷ってるんだ。まだ好きだから？」

「そうだと思う」

「でも、そんなことしたら、友達の家庭を壊すことになるし、ゆかりさん自身も壊れるかもしれない。みんな不幸になるのも分かってる？」

「そうよ。でも、行きたい気持ち、抑えられない」

「行っちゃだめだよ。友達はご主人がゆかりさんの元カレだって知らないんでしょ？『初めまして』って顔して行くの？　どんな事情があって別れたのか知らないけど、もう終わった関係でしょ？　彼も困ると思うよ。ゆかりさんは友達の家庭を壊したいの？」

ゆかりは乱暴に机を叩きながら、泣いた。

「そうよ。壊してやりたいって思ってるのよ。私、本当は隼人のこと、恨んでるから、、今でも」

「だめだよ。全部分かってて行ったら、一番苦しむのはゆかりさんだよ。そんな仕事続く

はずがないよ。ここにいてほしい。僕のアシスタントはしなくてもいいよ。自分の好きなこと見つければいい。ゆかりさんほどの絵の力があれば、おもしろい仕事がきっと見つかるよ。ゆかりさん次第だけど」

ゆかりはしばらくポロポロ涙をこぼしていたが、顔を上げて言った。

「まだわたし、隼人に未練があるのよ。そんなわたしと結婚できる？」

「今すぐになんて思ってないよ。ゆかりさんの中で彼が思い出になるまで、いつまでも待ってるよ。時間がゆかりさんの怒りをどっかに持って行ってくれるまで」

「分かった。何も知らない友達を不幸にするなんてこと、しちゃあいけない。分かってるの。先生の本当の気持ち、伝えてくれてうれしい。沖縄にはもう行かない。でも、結婚は待ってほしい。もう少し時間が欲しいの。わたしと付き合ってほしい。みんなと同じように、映画に行ったり、食事に行ったり。先生とアシスタントという関係で今までやってきたから」

「アシスタントはもうやめたい？」

「いいえ、先生の漫画のお手伝いは続けたいわ」

「じゃ、アシスタントをしてもらいながら、付き合おう。今日は渡もいないから、仕事が終わったら、外で食事をしよう」

それから、二人は黙々と仕事をした。そして、仕事が一段落した七時頃食事に出かけた。おしゃれなレストランなんて行ったことのない純平は、漫画仲間とよく行く居酒屋のチェーン店にゆかりを連れて行った。

「何飲もうかな。僕梅酒にするよ。ゆかりさんは？」

「グレープフルーツのチューハイにしようかな」

「女の人ってチューハイ好きだよね」

「ジュースで割ると飲みやすいのよ。何注文する？」

「枝豆に蛸わさにシシャモ」

「なんかおじさんぽい選択ね。わたしはトマトとモッツァレラ、それからチヂミにしようかな？　あっ、先生、トマトダメだっけ？」

「うん、生トマトはね」

「じゃ、止めて、カマンベールチーズのフライにするわ」

「先生って呼ぶのやめない？」

「でも、渡君と三人でやっていかなきゃいけないのよ。二人だけ親密になってしまったら、渡君やりにくくない？」

「そうか。同じ立ち位置でいるほうがやりやすいかな？」

純平はベルを押して、店員さんに注文した。一番先に来た枝豆をあてにチューハイを飲みながら、ゆかりが言った。

「先生はあんまり女の人と付き合ったことがないでしょ？」

「うん、ないね。一人だけ大学生の時、同じサークルの子と付き合ったけどね」

「どんな人だったの？」

「明るくてしっかりしてて、現実的な夢を持ってる子だった。いつも生き生きしてた」

「そう…。どうして別れたの？」

「自殺してしまったんだよ。その子」

「えっ！　自殺。先生、辛かったでしょうね」
「今までカラフルだった世界がいきなり白黒の画面に変わってしまったみたいだった。何もする気が起きなかったよ」
「今でも忘れてない？」
「忘れられないよ。貴子っていうんだけど、その子。貴子はいつでも僕を応援してくれてるって思うんだ。いつも励まされてたからね。でも、死んでしまったから、もう声を聴くこともできないし、触れることもできない。だから、大切な思い出として取ってあるんだ」
「貴子さんとはいいお付き合いしてたのね」
「僕たちはまだ子どもだったな。だから、僕は貴子を守れなかったんだと思う。僕はいまだに大人になれていない部分あるけどね。電機メーカーに勤めてたことあるけど、半年で辞めちゃったから、世間のこと、常識とかよく知らないよ」
「世間の常識なんて、どうでもいいことのような気がするわ。世間って意地悪でしょ？　自分たちと違う人や理解できない人や弱い人を攻撃するして、楽しむ。貧しい人や病気で苦しむ人には同情したふりをして、優越感に浸る」
「ちょっと厳しすぎないか？　世の中そんな人ばかりじゃないよ」
「そうかもしれないけど、私の周りの人には優しい人はいなかったわ」
「ゆかりさん、辛いことがあったんだね、いっぱい」
「わたし、元カレとは彼のご両親の猛反対があって別れたの。私の母、結婚しないでわたしを産んだの。相手の人は逃げて、認知もしてくれなかったみたい。母は苦労してわたしを育ててくれたわ。でも、世間の目は冷たかった。母は不倫の果てに私生児を産んだ女という目で見られたし、わたしも父親のいないかわいそうな子っていう同情の目の奥に蔑みの色を感じながら育ったの。今だったら、もっと生きやすかったかもしれない。向こうのお母さんがいろいろ調べて、そんな出生の人とは結婚、許すわけにはいかないって、諦めてくれって、彼に泣いて迫ったみたい。お母さんは夫の浮気で苦労したようで、譲れない部分があったんでしょうね。今は冷静に言えるけど、あの時は、彼に『結局、お母さんを選ぶのね。マザコンだったんだ』なんて、憎まれ口をたたいて、彼をののしったわ。お母さんの涙をそばで見てた彼は、これ以上お母さんに悲しみを味わわせることに耐えられなかったのでしょうね。嫌いになって別れたんじゃないから、いつまでも引きずってしまったの。わたしもそろそろ思い出ボックスにしまわないといけないな、彼とのことは」
「無理しないほうがいいよ。少しずつね」
「子どもみたいな先生のこと、これから、わたしが守ってあげなくちゃね」
「よろしくお願いします」
「アハハ」
　二人は初めてお互いの過去の断片を見せ合って遅くまで飲んだ。ゆかりは終電車で自分のアパートに帰って行った。
　翌日は渡も来て、三人でペン入れ作業に没頭していた。そんなとき、渡がボソッとつぶやいた。
「なんか二人おかしくないっすか？　何かあった？」
「何もないわよ。渡君が来なかったから、夜二人で居酒屋行っただけよ」
「えっ！　居酒屋？　俺も行きたかったっす。ひどいな、二人で行くなんて」

「また一緒に行こうね。渡君の漫画が入賞したら、お祝いに」
「何なんっすか。そんなの一生ないかもしれないっすよ」
渡があんまりすねるので、仕方なくその日も居酒屋に行くことになった。渡はビールを片手に、漫画作りの苦労話を唾を飛ばしながら、しゃべりまくった。
「俺、手の表情とか下手なんっすよね。背景もビルとかは得意なんっすけど、木とか海とか自然のものがなかなか描けないんすよ。全部自分でやるとなると、全部描けないといけないから、つらいっすよね」
「手は難しいよね。ほんとにどこかに間違った線が一つでもあると、不自然で表情のない作り物の手になってしまう」
「先生もそう思う？」
「僕もそう思うよ。柔らかい自然の中の線って難しいよね」
「うん、うん」
渡はしゃべりながら、空揚げや串カツ、レバにら炒めをつぎつぎ平らげていって、
「やっぱ若い子は違うね」と二人を感心させた。
酔いつぶれた渡を二人で支えて、夜道を歩いた。渡はまた今夜もうちに泊まることになるなと思いながら、純平は幸せだった。ゆかりがこっちを向いて笑った。

二十、結婚

純平とゆかりは、休みが取れると、映画に行ったり、美術館に行ったり、食事に行ったりと普通に付き合った。ゆかりは映画では恋愛物よりＳＦや推理物を好んだので、純平が見たい「エイリアン対プレデター」のような映画にも付き合ってくれた。特殊メイクやＣＧなどにも興味があるようだった。絵画も印象派の光と遊ぶような明るいきれいな絵よりも、ゴヤやゴッホ、ピカソといった強い個性を持った画家に惹かれるようだった。現代アートにも関心を持っているようで、純平と共通した嗜好の持ち主だった。時々ゆかりが晩御飯を作ってくれて、二人で向き合って夕食を食べることもあった。ゆかりの作るご飯は野菜中心で、若いのに煮物などよく出してくれた。ゆかりの心の闇を知ってから、純平はゆかりに何か自分に近いものを感じて、一層惹かれると同時に大切にしてあげたいという気持ちが強くなった。
秋の終わりごろ、ゆかりの実家に挨拶に行ったとき、ゆかりに似た母親は優しい笑顔で迎えてくれた。
「ゆかりはわたしのせいで、いろいろ肩身の狭い思いをしたからか、なかなか本心を見せないところがあるんです。本当はとても心根の優しい子なんですよ」
「お母さんも女手一つでゆかりさんを育てるにはいろいろご苦労もあったでしょうね」
「わたしは覚悟してこの子を産みましたから、世間の目には耐えられましたけど、この子には背負わなくてもよい十字架を生まれながらに背負わせてしまいました。かわいそうなことをしたと思ってます」
「お母さん、わたし、かわいそうじゃなかったよ。戦ってたもの。しっかり生きてたよ」
「そうね。頑張ってたね。純平さんに出会えて、この子も幸せです。末永く愛してやってください」

「僕もゆかりさんに支えてもらっています。お互いにやりたいことをやりながら、相手を思いやっていきたいと思っています。一生大切にします」
三人はゆかりの母親の作ってくれた料理をつつきながら、純平の仕事の話や漫画業界やアシスタントの渡のことなどとりとめのない話をした。母親はうなずきながら、ニコニコ話を聞いてくれた。
純平は和歌山の両親にもゆかりを会わせた。緊張していたゆかりだが、息子と結婚してくれるというだけで、両親はゆかりを歓迎し、もてなした。
「漫画家なんて生活も不安定だし、純平も頼りないとこあるし、本当に結婚していいの？」
母親はゆかりの本気度を心配した。
「純平さんじゃないと、わたし、だめなんです。そばにいて、支えあっていきたいと思ってます」
その言葉を聞いて、安心した母は
「純平のことよろしくお願いします」と息子をゆかりに託した。
それから母は、純平の小さい頃の漫画好きのエピソードや父親との確執など、暴露し、ゆかりも自分の過酷な生い立ちを語り、しみじみとした時間が過ぎていった。

二人は穏やかに付き合って、一年後の春、東京の小さなレストランを貸切にして、結婚お祝いパーティーを開いた。
真守が中心になっていろいろ手配してくれた。師匠である佐々木先生をはじめ、アシスタントの渡、元アシスタントの秀樹、唯、それから担当の吉村さんと鈴木さんも忙しい中、顔をみせてくれた。純平の両親とゆかりの母親は同じテーブルについて話している。
「漫画家って生活不安定なのに、結婚してくれてありがたいと思っています」
「いえいえ、よき伴侶に恵まれてゆかりも幸せそうで安心しました。純平さんは真面目だし優しいし、ゆかりを大切にしてくれてるみたいで、喜んでいます」
「純平は世間知らずなところがありますからね。しっかりしたお嫁さんが支えてくれないと、あぶなっかしいんですよ」
「ゆかりがしっかりしてるかどうか分かりませんけど、まあ、仲良くやってくれたら、言うことないです」
「そうそう、仲良くね」
純平の父親のほうはいろいろいじられている純平とゆかりをニコニコしながら、眺めていた。父と純平ははいろいろあった。とはいっても、直接父と言い争っていたのは、いつも姉の昌子で、純平は横で聞いている格好だった。父は家族のために犠牲にするものも多かったのかもしれない。それでも、自分の生き方が男として父親として間違っていないという確信があったのだろう。同じような道を純平にも歩んでほしかったのかもしれない。
一方では、漫画家になりたいという純平の夢も応援してやりたい気持ちもあったのだろう。東京の書店で純平の原画展があったときも、出張の帰りに寄って、写真を撮ってきてうれしそうに母に見せたりしていた。漫画家として一応やっていけていて、よき伴侶にも巡り会えた息子の姿を見て、感慨深かったようだ。
和歌山から駆けつけてくれた達也と祐介は渡と意気投合して、食べたり飲んだりしている。ゆかりの友達の亜由美もはるばる沖縄から身重の体をおしてやってきてくれた。

「カフェを手伝ってって言ったとき、断られた理由、分かったよ。好きな人が東京にいたんだね。幸せそうでよかった。わたしも六月には子どもも生まれるし、カフェもまあまあ順調にいってるし」
ゆかりは亜由美の飛び出したお腹をまぶしそうに見ながら言った。
「手伝えなくてごめんなさい。赤ちゃん、できたら、どうするの？　手が足りなくなるでしょ？」
「一人入ってもらおうと思ってる。よくカフェに来る女のがいるんだ。とても明るくて、よく動くの。仕事探してるみたいだったから、声かけたら、来てくれるって言ってくれたの」
「そう、いい人、見つかってよかったね」
「うん。隼人も安心したみたい。子どもが生まれると、何かと大変そうだから。きょうもパーティーに呼んでもらったんだけど、地元の若者の会が入っちゃってたのよ。お店をやってる仲間なのよ。みんなで何か新しい企画考えてるのよ。やっぱり地元の人との結びつきって大切でしょう？　そっちのほうを優先させちゃってごめんね。隼人は『良きパートナーとともに末永くお幸せに』って伝えてくれって言ってたよ」
『『ありがとう。隼人さんも父親になるんだから、今以上に頑張ってね』って言っておいてね」
「うん、伝えとくよ。優しそうな旦那さんだね。よかった。ゆかりにもやっと心のよりどころができたみたいだね」
「ありがとう。私、今とっても幸せよ」
パーティーもいよいよ余興の部に突入したようで、仮設ステージでは、佐々木先生と唯ちゃんが「バタフライ」を熱唱していた。真守と達也と祐介は純平の暴露話で盛り上げ、渡は大声で「乾杯」を歌った。亜由美も飛び入りで、十八番の「涙そうそう」を朗々と歌った。歌の内容はおいておいて、亜由美の声はすばらしかった。秀樹さんは輪っかのジャグリングを披露して場を沸かせていた。悪乗りした親たちも三人で「テントウムシのサンバ」を歌い、初めて会った人たちも以前からの知り合いのように和気あいあいとした雰囲気で時間は流れていった。最後に純平が挨拶した。
「僕たちのために集まってくれてありがとうございました。結婚なんてできると思っていなかったので、ゆかりさんに出会えて本当にラッキーでした。お互いを大切にして一緒に歩いていきます。これからも見守っていてください。忙しいので新婚旅行はお預けという形になりましたが、時間ができたら、近場の温泉にでも出かけようと思います。本当に今日はありがとうございました」
結婚パーティーは無事お開きになり、みんなそれぞれの場所に戻って行った。真守と達也と祐介は三人で連れ立って、また飲みに繰り出した。今晩ビジネスホテルに泊まるらしい。純平の両親とゆかりの母親は純平たちの用意したホテルに泊まってもらった。純平とゆかりもそのホテルでゆっくり一晩過ごすが、あしたからはまたペン入れの仕事が待っていた。
次の日、三人はいつもと同じように、ペン入れに励んでいた。突然、渡が思いついたように、ゆかりに話しかけた。

「ゆかりさんはアシスタント、続けるんだね。掛け持ちしてたアシスタントはどうするの？」
「二つ掛け持ちしてたのは、もうやめさせてもらった。これからは公私にわたって先生の専属アシスタントよ」
「うわあ、いいな、公私にわたってなんて」
「でも、空いた時間でイラストの仕事、探すつもりよ」
「いいっすね。俺も早く結婚したいな」
「渡は漫画家になることが先決よ」
「頑張ります！」

純平はこの忙しいけれど、優しい時間をこよなく愛していた。この先、渡も漫画家になり独立していくだろうし、ゆかりも新しい仕事を見つけて、アシスタントは辞めるかもしれない。赤ちゃんだって生まれるだろう。そしたら、また新しいアシスタントに入ってもらうことになる。周りの状況は時の流れとともに少しずつ変わっていくだろう。でも、僕は自分のために家族のためにずっと漫画を描き続ける。描きたいものはまだまだいっぱいある。「戦い」は悪者と善者のバトルだけではない。人は生きていく中で、いろいろなものと戦わなければならない。友達や親、同僚、上司、人だけじゃなく、自分との戦い、弱気や怠け心や嫉妬、自分ではどうしようもない病気や社会の流れ、それらと戦い、ある時は妥協や諦念を強いられながら、生きていかなければならない。そのような「戦い」も背景に取り入れて、本当に描きたいものを描ける漫画家になりたいと思う。妙なブームに流されず、日々努力あるのみだ。今はゆかりがそばにいてくれる。純平は漫画への強い思いを改めて胸に刻んだ。
「さあ、もう一頑張りだ！」
「おう！」

〈了〉